NUEVA

ヌエバでチャンピオンを目指せ!!

国際ハンドボール連盟公認球

日本リーグ唯一の公式試合球

全日本大学選手権(インカレ)唯一の公式試合球

JAPAN HAND BALL ASSOCIATION 検定

日本ハンドボール協会検定球



本大会試合球

国際ハンドボール連盟公認球
日本ハンドボール協会検定球

32H300WRB　ヌエバ

●手縫い●天然皮革●3号球●32枚パネル●白×赤×青×黒

国際ハンドボール連盟公認球
日本ハンドボール協会検定球

32H200WRB　ヌエバ

●手縫い●天然皮革●2号球●32枚パネル●白×赤×青×黒

molten®

株式会社モルテン

東京本社　〒130-0003 東京都墨田区横川5丁目5-7
大阪・名古屋・福岡・広島・四国・仙台・札幌・リノU.S.A.・デュッセルドルフG

ハンドボールを より素晴らしいものに！



(財)日本ハンドボール協会専務理事　大西武三

21世紀最初の年も始まりましたが、現代社会はグローバル化、情報化、経済不況、少子化等によりその変化は目覚ましいものがあります。スポーツの世界においても社会の変動の波にもまれて変革を余儀なくさせられています。このような大切な時期に専務理事の大役を仰せつかり、その責任の重さを痛切に感じておりますが関係者の理解とお力添えを得て微力ながら最大限の努力で乗り切りたく思っておりますのでよろしくお願い申し上げます。

日本協会では、社会やスポーツ界の新しい波のなかで、従来の施策に加えてそれを乗り越えようとする新たな施策が実施されています。「がんばれハンドボール10万人会」、「ナショナルトレーニングシステム」、「アテネ特別強化委員会」、「普及特別委員会」です。

「がんばれ10万人会」は、現代のスポーツは、競技をする人だけでなく見る人、支援する人等全てがハンドボールに関わる人たちであり、いわばハンドボールファミリーです。従って登録者は競技者だけでなくサポーター、役員、指導者、審判等すべてが登録者になります。ハンドボールが社会の中で認められる団体となるためには10万人が一つの目安になるとの事から始まったものです。ハンドボールの競技人口が減少する中で、多くの人たちが会費を出し合って経済基盤の支援をするとともにハンドボールの仲間を増やし、第一ステップである10万に早く到達したいものだと思います。そのためには、都道府県協会・連盟が自分たちの10万人会であるという意識に立てるものにしていかなければならないと考えています。

「ナショナルトレーニングシステム」即ち「NTS」は、国際競技力を育てていくためには、ジュニア期から青年にいたるまで一貫したトレーニングを課していく必要性から生まれ出たものです。まだ始まったばかりですが、これを契機として、選手の育成だけでなく指導者の資質の向上や普及面での役割も期待でき、皆さんのご理解とご協力を得て、実のあるNTSにしていくことが求められています。

「アテネ特別強化委員会」においては、強化部との連携により、アテネには必ず出場するという強い目標をもった特別委員会です。「オリンピック好きの日本人」の言葉に示されるように、ナショナルチームの国際舞台での活躍は社会の関心と人々の感動を呼び、様々な方面へ大きな影響を与えます。男子はソウル以来3大会に、女子はモントリオール以来5大会に出場を逸しています。アテネには強い意志で「出場必達」を実現しなければならないと考えています。

「普及特別委員会」は、ハンドボールを普及させていくためのシステムを策定していく委員会です。ともすれば、競技力向上に重点がおかれるのが競技団体です。今後は普及にも力を注ぎバランスのとれたハンドボール界にしていく必要があります。ハンドボールが国技であるデンマークから招いたIHF講師のアラン・ルンド氏が言っていました。「デンマークではハンドボールは文化である。日常の会話の中で話題になる」。ハンドボールが学校だけでなく、生涯スポーツとして地域に根をはやし、小学生からマスターズまで市町村のクラブでハンドボールに汗を流す日が到来する日をぜひ実現しなければならないと考えております。

私は、長い間日本協会の常務理事として指導者の育成や普及に携わってきましたが、今回の専務理事就任は、都道府県協会・連盟と密接な連携をとって、普及を推し進めるようにとの要望からと受け取っています。ハンドボールをより素晴らしいものに育て、そしてそれをより広く普及できるよう皆さんとともに頑張りたいと思います。

最後になりますが、皆様方の御活躍をお祈りするとともに、国内外で今年も多くの大会や事業が開催されます。皆様方の御支援・御協力をお願い申し上げます。

新理事としての抱負

常務理事就任にあたって



総務・財務担当
松原　光三

このたびの改選で、図らずも財務・総務担当の常務理事を努めさせていただくことになりました。諸先輩方のご努力で築き上げられました伝統ある日本ハンドボール協会の執行部の一員として協会運営に参画できますことを大変光栄に思うと同時に、責任の重大さを痛感しています。

現役選手を引退して20数年。最近までハンドボールの一愛好者として各種の試合を観戦したり、応援したりで、これまで、協会の仕事に関しては全く経験がありませんでした。ところが2年前から縁あって学生連盟や協会の総務関係の仕事を手伝う機会があり、この2年間の経験から、多少とも協会の各業務について理解ができたのではないかと思っています。

日本協会は今年度の事業計画として長期的に「がんばれハンドボール10万人会」「ナショナルトレーニングシステム」「普及特別委員会」の積極的展開、短期的には「アテネ特別委員会」によるオリンピック出場のための強化施策の実施を掲げて各事業を展開する方針です。

それぞれの事業とも目標達成のためには様々な課題が山積しています。

執行部が各々の立場でベストを尽くす事はもとより、全国のハンドボール愛好者の皆様のご理解とご指導、ご支援が得られてこそ、はじめて所期の目的が達成できるのではないかと思います。

今般、協会の財務・総務を担当するにあたり、幸いにも会社生活で総務関連の業務に長く携わっており、これまでの経験が微力なりとも協会運営の一助となるよう精一杯努めてまいりたいと思います。

今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。



普及・指導担当
角　　紘昭

1　草ハンドボール、草の根ハンドボール

ある小学校の放課後の遊びでこんなことが目につきました。その学校では、校庭が狭いため、放課中の遊びは、サッカーやバットを振る野球のような遊びは禁じられていました。そのために、ドッジボールや追いかけっこが中心でしたが、高学年での体育の授業でハンドボールをやったところ、放課時にはサッカーゴールの前で、「ボールをまわして、シュート」という「草野球ならぬ、草ハンドボール」が始まり、瞬く間に低学年の子までが「草ハンドボール」に取りつかれてしまいました。

中学校や高校でハンドボールを経験した青年たちは、卒業後どうしてもハンドボールが忘れられなくてクラブチームを結成し楽しんでいる光景は地区のクラブリーグ戦などでよく見かけます。草の根ハンドボールは盛んです。

今年、第９回を迎える全国マスターズ大会（男性40歳以上、女性35歳以上）は、参加者数が400名近くにもなる程の、家族連れで楽しめる大きな大会になってきました。

ハンドボールに出会うきっかけと（教科体育・部活動・スポーツ教室等々）、ハンドボールの技術を修得できる指導

者（生涯スポーツ指導者）と巡り会い、それを楽しむ場所と機会(ハンドボーラーのニーズに合った大会、交流会)が用意されれば、まだまだこのスポーツは広がっていきます。

日本協会のみならず各都道府県協会のあり方が問われています。これまでのイベント・大会消化型の運営ばかりではなく、ハンドボーラー一人一人のスポーツライフを充実させるための協会運営、すなわち生涯スポーツ経営型運営へと転換すべき時が来ています。

いま、ＮＴＳを通しての指導の一貫性が作り上げられようとしていますが、日本協会、各都道府県協会を問わず、その運営方針の一貫性もまさに必要なときだと考えます。

２　ハンドボールアイドルの創造を

ハンドボールにもアイドルが必要です。日本リーグやナショナルプレーヤーの中から、青少年をはじめとするハンドボール愛好者がそのプレーばかりでなく、スポーツライフ丸ごとを理想とするスポーツマン・ウーマンを育てあげることが必要です。

そのためのハンドボールスポーツ文化を理解した指導者の育成と、第一歩を歩みだしたＮＴＳというシステムを充実させ、幅広いすそ野の中から太く高く育てたハンドボールアイドルの出現を現実のものとしたいものです。

こんなことが、普及・指導の役割だと考えています。



強化担当
緒方　嗣雄

この度の改選で常務理事に任命頂き、また強化委員長の重責を仰せつかりました。まだまだ力は足りず、万事未熟だと自覚いたしておりますが、精一杯努力致したいと考えております。しかし、意欲ばかりで務まる役目でなく、いろいろと諸先輩にご指導お力添えをお願い致し、勉強していく所存です。

昨年の１月総力をあげてシドニーオリンピックアジア予選に臨みましたが残念な結果に終わりました。ハンドボールのメジャー化には、オリンピック出場は必要不可欠であります。2000年４月より新しくアテネオリンピック特別強化委員会が設置されました。アテネオリンピック出場を第一の目標にアテネプランと称し、国内国際試合（春のアジアナショナルサーキット、夏のジャパンカップ）の増加、学生及び若手強化のための留学制度、海外合宿・情報収集の強化拠点の設置、外国人コーチの招聘、エキサイティングな試合のための賞金試合、外国人の帰化等でアテネオリンピックの出場を目指してまいります。

日本国内の試合シーズンと、ナショナル強化期間に分けることにより徹底してナショナルチームの強化に努めます。海外強化拠点を中心に長期海外合宿を張り国際試合の増加と、トレーニングを重ね、身体的、精神的にタフネスな選手育成に力を入れ、常に相手チームに動じることなく十分に実力発揮できるチームを作りアテネオリンピック出場実現に全力投球いたします。

また、恒常的にオリンピック出場を果たすため、ハンドボールの普及と強化を一体とし、選手発掘、育て、活かす一貫指導システムを推進し、勝利の方程式を確立させることと、指導者育成にも力を入れなければなりません。もう一点は強化普及事業の財源を補い、財政基盤を確立するため、全国的にサポートを募りハンドボール界のパワーアップを図り、ハンドボールの魅力をアピールするイベントの企画、また協賛企業を増やして財政確保も強化推進していく必要があります。ナショナルは総力を結集しアピールし、オリンピック出場を実現させるため頑張りますので、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

特集 第25回日本ハンドボールリーグ総決算

第25回日本ハンドボールリーグ プレーオフを終えて

川上　憲太

(1)第25回、節目の大会

多くのスポンサー・企業・チームを抱える企業の皆様、そしてサポーター、さらにたくさんのハンドボール関係者・諸先輩の協力と努力によって積み重ねられた日本リーグがここに第25回、４分の１世紀の歴史を重ね、新しい世紀の幕開け、21世紀の初頭にプレーオフが行われましたことは、誠に喜ばしく関係各位のご努力に改めて敬意を表する次第であります。

(2)激しく戦ったレギュラーシーズン

男子はアイスランドからＤ・シグルドソン、スペインから帰国の田場を加え、酒巻新監督体制の湧永製薬、ヴォル新監督体制の本田技研、韓国ナショナルプレーヤーを擁す末岡新監督率いる大同特殊鋼、中川らの活躍で粘った三陽商会と最後まで順位のわからない激しいレギュラーシーズンとなりました。

女子は昨年からＯＳＡＫＩ　ＯＳＯＬ、大和銀行、ジャスコとリーグ撤退が相次ぎ、９チームの争いとなりましたが、シャトレーゼの活躍もあり最後までプレーオフ出場へ向けて激しい戦いが繰り広げられました。

(3)歴史に残るプレーオフ大会

まさに日本のトップゲーム、各チームが一年間積み上げ



たすべての力を全知全能を傾けてぶつかりあうまさに死闘が展開された４試合だったと思います。

会場には元オリンピック選手小野清子さん、バレーボールＶリーグ岡野委員長、バスケットＷリーグ安達専務理事、サッカーＵ—20西村監督、小野コーチ他たくさんのお客様が来られましたが、皆さん全員が「ハンドボールはこんなに激しい、こんなに熱くなるスポーツなんだ」と改めて感心されていました。

女子は、悲願の決勝進出をねらう北國銀行の素晴らしい闘志、またこれをしりぞけ全日本総合の雪辱を胸に決勝進出したオムロン、迎え撃つイズミは、林監督が出産後の驚異的コンディショニングでコートに立ち、全選手をまとめオムロンの挑戦を見事にはねかえしました。試合後数時間も経っているのにまだくやしさで目をはらしていた、オムロン西窪監督の姿に来シーズンの激闘が期待できました。

男子は、まさに３つどもえ、一瞬のまばたきも許されない２試合でした。まさに日本のハンドボールの今年度の集大成にふさわしいエキサイティングゲームでした。この様な試合の連続を積み重ねていけば、必ずやアテネが見えてくるし、ファンもマスコミも一体となったハンドボール・フィーバーも遠くないと確信する素晴らしい試合でした。

(4)盛り上がった大会会場

今回も東京・駒沢体育館で大会が行われましたが、好天にも恵まれ、連日2000人の観客動員ができ、会場内は好ゲームの連続もあって、素晴らしいムードでした。特に決勝の２ゲームが、スタンドが揺れる、一つ一つのプレーごとに悲鳴にも似た歓声があがる光景の連続でした。

テレビ放映は、今回もテレビ神奈川がゴールデンタイムに２日間にわたり全ゲームを放映しました。各マスコミもＮＨＫはじめ新聞各社（地方紙も含め）20数名の記者の方が来場されました。

ＡＮＡ　ＣＵＰということで大会メインスポンサーであります全日本空輸株式会社より東園常務取締役販売本部長がプレゼンターとしてお見えになり、「ハンドボールがこんなに激しい試合とは知りませんでした」と熱く語っておられました。

皆様のおかげをもちまして素晴らしい大会となりましたことを厚くお礼申し上げますとともに、来シーズンのご支援、ご声援をお願い申し上げます。

３連覇を達成して！

本田技研ハンドボール部総監督　山村敏之

第25回日本ハンドボールリーグの全日程を無事に終了することができ、本田技研ハンドボール部として３連覇による５回目の優勝を達成できましたことについて応援して頂いた皆様方、またリーグ関係者各位の皆様方に心より感謝致します。一年間本当にありがとうございました。

今リーグを振り返ると、前期リーグにて湧永製薬チーム（レギュラーシーズン1位）に10点差をつけて勝利したものの、大同特殊鋼チームに11点差、後期リーグの湧永製薬戦で10点差をつけられて大敗するというように、好不調の波が激しくチーム力としては不安定な状態であったと思います。しかし結果的に言えば、勝つことによりチームの問題点が見えなくなることも多く、逆に大敗したことにより、チームの弱点、問題点が明確になりプレーオフ直前にチームを一つにした出来事となったように思います。

プレーオフ準決勝、決勝においては計4人のレッドカード失格者を出しながら、コートに残った日本人選手達が最後の最後まで諦めず必死で戦ってくれた結果、3連覇を達成することができました。素晴らしい選手達に囲まれ、私にとって一生涯忘れることのできないシーズンになりました。またチームにとっても今回のプレーオフの経験は大きな財産となることでしょう。

来シーズンも引き続き皆様からのご指導、ご声援、よろしくお願い致します。

プレーオフを振り返り

イズミ監督　林　五卿

まず、日本リーグ運営面で各関係者皆様方に感謝の言葉を申し上げます。

第25回日本リーグを振り返って考えてみると、私、そしてイズミのチームにはとても大きな意味のある大会期間でした。きついリーグ期間中、声を出し笑うことのできなかった心情の中、3連覇へのプレーオフ決勝戦で終了の笛が聞こえる瞬間にフッと笑顔がこぼれました。

リーグが始まる直前、私は産休のため指導だけでした。また、呉選手は韓国ナショナルチームへ戻り、残りの日本人選手だけのつらい訓練で、選手一人一人がすごく伸びてきました。今回のリーグ目標は3位でした。スタートは思ったより悪く、試合を重ねるごとに日本の選手と呉選手のコンビがうまくいくようになり、監督の私がいないコートの中で選手達の「ファイト」の声が聞こえるようになりました。

後期の途中、出産後の私がコートに戻り少しでも力になる様に最善を尽くしました。そして、プレーオフは1位で出場することができました。

プレーオフ決勝戦では思ったより選手達も緊張していたため、苦しい立ち上がりになりました。練習では、相手の動きから守る形もすべて指示して試合に臨んだのですが、思った以上の緊張からその通り体も動かず、ミスして落ち込んでプレーする選手達にハーフで練習でできたことを隣の人を信じてやること、ミスしても笑顔で最後まで盛り上げながらやることを指示しました。後半スタート5分、6連取したことで少しずつイズミのペースになり選手達は最後の笛を聞くまで頑張った結果が優勝という形になったと思います。

多くのプレッシャー、特に3連覇という大きな荷物を持って選手達と力を合わせて頑張れば必ず良い結果が出る、という言葉を信じ、やってきたことが優勝につながったのではないかと思います。(もう一度イズミチームのみんなに感謝に言葉を伝えたい)

1年間、ハンドボール界の発展とイズミチームの物心両面にわたって応援していただいたみなさんに感謝しています。今まで頑張ってきたようにこれからも監督兼選手として日本ハンドボールのレベルアップのために頑張りますので応援よろしくお願い致します。

プレーオフを振り返り

MVP　イズミ　呉　成玉

今シーズンを振り返り、まずハンドボールを愛する全ての方々に感謝の気持ちを伝えたいです。

今シーズンを振り返ってみるとさまざまなことが頭の中を流れてきました。シーズンが始まる前、出産で林監督が抜ける中、一人で優勝に向けてこのチームを引っ張っていけるか悩みましたが、とても優勝できるとは考えられませんでした。でも、リーグが始まり、いろいろ不安で涙が出そうな時もありましたが、この気持ちも短い間で、試合を重ねるごとに選手との呼吸も合うようになり、難しい試合でしたが、楽しみながらすることができました。やはり心を開いてチームのことだけを考えてやれば結果は勝つことしかないと思いました。そんな良い雰囲気の中でプレーオフのキップを得ることができたので、自分の中で優勝するぞという闘争心と緊張感がだんだんと高くなっていきました。

今までオリンピックなどの大きな大会を数々経験してきましたが、やはりこのプレーオフという日本の大きな大会を前にして緊張感で胸が高ぶってきました。大勢の観客の中、私が持っている全てを出してやり、試合終了の笛が鳴った瞬間、92年のバルセロナオリンピックで金メダルをとった時のことを思い出しました。また、MVPまでいただけたので本当に嬉しかったです。私がMVPをいただくことになったのも全てイズミを応援してくださった方々と、一緒に呼吸を合わせて頑張った選手達のおかげだと思います。全ての方々に感謝の心を伝えて私の最後の言葉にしたいと思います。

日本ハンドボールの今後のますますの発展を心から祈りながら・・・。イズミチームを個人的に愛しています。

個人表彰

【１部】《男子》
〈最優秀監督賞〉フレデリック・ヴォル（本田技研・初）
〈最高殊勲選手賞〉四方　篤（本田技研・初）
〈殊勲選手賞〉下川真良（湧永製薬・初）
〈得点王〉白　元喆（大同特殊鋼・初）103点
〈フィールド得点賞〉白　元喆（大同特殊鋼・初）92点
〈シュート率賞〉小沢勝利（湧永製薬・初）0.664
〈７ｍスロー得点賞〉セルゲイ・ジザ（本田技研熊本・初）29点
〈７ｍスロー阻止賞〉多田恵久（湧永製薬・初）９本
四方　篤（本田技研・②）９本
〈最優秀選手賞〉白　元喆（大同特殊鋼・初）
〈最優秀新人賞〉古家雅之（湧永製薬）
〈ベストセブン賞〉
ＧＫ・坪根敏宏（湧永製薬・初）
ＣＰ・下川真良（湧永製薬・初）
山口　修（湧永製薬・初）
小沢勝利（湧永製薬・初）
中川善雄（三陽商会・初）
白　元喆（大同特殊鋼・初）
ステファン・ストックラン（本田技研・③）
〈ベストディフェンダー賞〉山口　修（湧永製薬・初）
〈フェアプレー賞〉湧永製薬（84点／14試合）

【１部】《女子》
〈最優秀監督賞〉林　五卿（イズミ・④）
〈最高殊勲選手賞〉呉　成玉（イズミ・②）
〈殊勲選手賞〉山口文子（オムロン・初）
〈得点王〉中塚充子（立山アルミ・初）103点
〈フィールド得点賞〉呉　成玉（イズミ・②）85点
〈シュート率賞〉藤浦美絵（シャトレーゼ・初）0.795
〈７ｍスロー得点賞〉菅原有紀（シャトレーゼ・初）43点
〈７ｍスロー阻止賞〉山口文子（オムロン・④）24本
〈最優秀選手賞〉呉　成玉（イズミ・②）
〈最優秀新人賞〉村上麻美（北国銀行）
〈ベストセブン賞〉
ＧＫ・山口文子（オムロン・④）
ＣＰ・小松真理子（北国銀行・④）
倉知光子（日立栃木・初）
藤浦美絵（シャトレーゼ・初）
上出恵美子（北国銀行・初）
中塚充子（立山アルミ・初）
呉　成玉（イズミ・③）
〈ベストディフェンダー賞〉上出恵美子（北国銀行・②）
〈フェアプレー賞〉シャトレーゼ（78点／16試合）

【２部】《男子》
〈最多得点賞〉神田友和（北陸電力・初）62点
〈フィールド得点賞〉神田友和（北陸電力・初）62点
〈シュート率賞〉材木圭二（アラコ九州・②）0.649
〈７ｍスロー得点賞〉八幡幸規（大阪ガス・初）17点
〈７ｍスロー阻止賞〉佐藤　優（トヨタ自動車・初）７本
嶋崎智彦（大阪ガス・初）７本
〈ベストディフェンダー賞〉金子和利（トヨタ自動車・初）
〈新人賞〉半田信吾（豊田合成）
〈フェアプレー賞〉豊田合成（37点／10試合）
〈ベストセブン賞〉
ＧＫ・谷川一寿（アラコ九州・②）
ＣＰ・師田久樹（北陸電力・②）
神田友和（北陸電力・初）
材木圭二（アラコ九州・初）
保科秀和（トクヤマ・③）
元島邦彦（アラコ九州・⑤）
村上直樹（アラコ九州・初）

第25回日本ハンドボールリーグプレーオフ
男子は本田技研、女子はイズミが制す!!

【男子】

〈準決勝〉

本田技研　26（13―11 / 13―11）22　大同特殊鋼

■接戦を制し、本田が３連覇に向け決勝進出

レギュラーシーズンは、１勝１敗と五分の星。まずは昨年チャンピオン本田に挑む形の大同。レギュラーシーズンの様な激しいぶつかり合いかと思われたが、立ち上がりは淡々と打ち込む本田ストックランに対し、大同は冨本のミドル、白のステップで応戦。しかしストックラン、ヴォルで連取する本田に対し、８対４となった17分過ぎに、大同のタイムアウト。それからは南川のサイドなどで２点差に追いつき、13対11の本田リードで前半を終えた。

後半は、白のステップで追撃体制に入る大同だが、８分からヴォル、佐々木で５連取した本田が一歩抜けだし６点

差。ここで大同がタイムアウトをとり、白のミドルなどで反撃に出る。一進一退の攻防が続くなか、残り3分、大同松林が意地を見せ、ポスト、速攻で2連取。3点差に詰め寄るが、残り1分、佐々木のミドルが決まり、勝負は決まった。4点差で本田が勝利し、プレーオフ初の3連覇に向け万全で決勝に進出した。



〈決勝〉

本田技研　25（12−16 / 13−8）24　湧永製薬

■本田技研、3連覇達成／

3連覇をかけた本田だが、今年はシーズン1位で湧永が迎え撃つ形となった決勝戦。まずは下川のサイドシュートで先制した湧永が序盤11分まで4連取してペースをつかんだ。本田のヴォルのミドルやストックランのカットイン、ミドルなどで追撃に入るが、湧永は小沢のまわりこんでのミドルや、山口のポストシュートで反撃。前半終了間際にはブルーノの2連続速攻で4点差をつけハーフを迎えた。

後半も、田場の速攻で幕を開け、湧永のペースかと思われたが、中盤までに本田がストックランのミドルや谷口のサイド連取などで4連取し、初めて20対20と同点に追いついた。ここで湧永も小沢のサイドや下川のスピードある速攻で2点差にする。本田はヴォルを3回目の退場で失格、ストックランも危険プレーにより失格と、両外国人エースを欠くものの、四方の3連続ファインセーブもあり、残り3分、広政の7ｍＴで初めて逆転する。しかし湧永シグルドソンのステップが決まり、残り5秒、同点延長かと思われた瞬間、本田佐々木のロングシュートが決まり、歓喜のタイムアップとなった。

【女子】

〈準決勝〉

オムロン　22（12−9 / 10−8）17　北國銀行

■固い守りのオムロンが粘勝し、明日の切符を握った

レギュラーシーズン2位のオムロンに、3位北國が挑む準決勝。シーズン中はロースコアーで僅差の戦いであったが、ホーム・アウェイ共オムロンが制している。

北國のスローオフで始まったが、オムロン山下がミドル、カットインなどで4連取し、序盤はオムロンペースで進む。たまらず北国がタイムアウトを要求し、流れを変えようとする。その後、小松のサイドで1点目をあげ、3点差のままゲームは進み、12対9とオムロンリードでハーフタイムをむかえる。

1人少ない人数で後半をむかえたオムロンに対し、中村のステップ、上出の速攻で北國が13対13と同点に追いつく。両者退場者を出し、一進一退の攻防が続くなか、宮本のペナルティー、ステップシュートで抜け出そうとするオムロン。村上のミドルシュートなどで対抗する北國だが、日本の第一人者であるＧＫ山口がファインセーブを連発し、残り2分、オムロン林の速攻で4点差になりタイムアップを迎えた。オムロン山下の9得点、山口のファインセーブが光るゲームであった。



〈決勝〉

イズミ　26（13−12 / 13−7）19　オムロン

■イズミ、王者の貫禄で3連覇達成／

昨日、僅差の準決勝をものにしたオムロンが、レギュラーシーズンの順位通り決勝に進み、シーズン単独首位のイズミと今シーズンのチャンピオンをかけた決勝。イズミは呉の速攻からの個人技で7ｍＴを誘い、川村が決めて先制。オムロンも林がサイドから鮮やかに打ちぬき、一点を争う序盤となった。呉の豪快なロング、確率の高い川村の7ｍＴで加点するイズミに対し、宮本のステップ、陳のポストで対抗するオムロン。双方譲らず13対12、イズミ1点リードでハーフを迎える。

後半は、オムロンのシュートミスやＧＫ高森のファインセーブからタイムアウトをはさみ、速攻で6連取。後半10分で7点差とイズミ優位に進む。オムロンも林、呉にダブルマンツーをつけ、大石や新鋭山田などのミドルで残り11分、3点差とするが、勝負どころでのＧＫ高森の7ｍＴ阻止もあり、イズミが7点差で3連覇を達成した。

第25回日本ハンドボールリーグ成績表（レギュラーシーズン日程終了）

順位	【1部男子】	湧永製薬	本田技研	大同特殊鋼	三陽商会	本田技研熊本	トヨタ車体	OSAKI OSOL	デンソー	試合数	勝数	引分数	敗数	勝点	総得点	総失点	差
1	湧永製薬		19 27 ●○	22 33 ○○	28 20 ○○	28 22 ○○	20 25 ○○	19 23 ○○	40 38 ○○	14	13	0	1	26	364	258	106
2	本田技研	29 17 ○●		17 19 ●○	27 22 ○○	26 28 ○○	23 28 ○○	25 28 ○○	30 14 ○○	14	11	1	2	23	333	236	97
3	大同特殊鋼	19 28 ●●	28 15 ○●		22 25 △△	25 23 ○○	28 29 ○○	27 28 ○○	40 36 ○○	14	9	2	3	20	373	268	105
4	三陽商会	17 16 ●●	14 21 ●●	22 25 △△		18 19 ○○	25 32 ○○	14 16 ○●	30 29 ○○	14	7	2	5	16	298	286	12
5	本田技研熊本	12 14 ●●	10 12 ●●	17 17 ●●	17 18 ●●		22 18 ○●	19 22 ○○	22 26 ○○	14	5	0	9	10	246	309	−63
6	トヨタ車体	14 21 ●●	11 23 ●●	19 19 ●●	21 19 ●●	19 29 ●○		21 18 ○△	23 27 ○○	14	4	1	9	9	284	321	−37
7	OSAKI OSOL	17 15 ●●	12 17 ●●	18 16 ●●	10 22 ●○	17 14 ●●	17 18 ●△		26 20 ○○	14	3	1	10	7	239	293	−54
8	デンソー	17 22 ●●	13 14 ●△	10 14 ●●	18 17 ●●	18 23 ●●	17 19 ●●	15 18 ●●		14	0	1	13	1	235	401	−166

※上位3チームはプレーオフで順位を決定する。

順位	【1部女子】	イズミ	オムロン	北国銀行	シャトレーゼ	日立栃木	立山アルミ	ブラザー工業	ソニー国分	ムネカタ	試合数	勝数	引分数	敗数	勝点	総得点	総失点	差
1	イズミ		21 20 ●○	19 27 ○○	26 25 ○○	25 24 ○○	28 33 ○○	16 23 ○○	22 34 ○○	28 30 ○○	16	15	0	1	30	401	288	113
2	オムロン	23 18 ○●		16 25 ○○	21 20 ○△	17 13 △△	20 19 ●△	18 23 ●○	27 21 ○○	35 38 ○○	16	9	4	3	22	354	256	98
3	北国銀行	16 16 ●●	15 15 ●●		14 25 △○	17 20 ●○	25 25 ○○	25 22 ○○	23 29 ○○	30 24 ○○	16	10	1	5	21	341	262	79
4	シャトレーゼ	19 17 ●●	17 20 ●△	14 16 △●		19 23 ●○	26 24 ○○	29 30 ○○	28 35 ○○	41 32 ○○	16	9	2	5	20	390	312	78
5	日立栃木	21 23 ●●	17 13 △△	18 19 ○●	20 14 ○●		22 17 ○●	22 31 ●○	20 36 ○○	31 34 ○○	16	8	2	6	18	358	297	61
6	立山アルミ	18 20 ●●	21 19 ○△	15 18 ●●	17 18 ●●	20 18 ●○		22 26 ○○	31 29 ○○	42 29 ○○	16	8	1	7	17	363	329	34
7	ブラザー工業	13 21 ●●	21 13 ○●	14 13 ●●	18 17 ●●	23 16 ○●	12 14 ●●		21 19 △○	23 24 ○○	16	5	1	10	11	282	352	−70
8	ソニー国分	18 22 ●●	13 17 ●●	18 11 ●●	25 26 ●●	16 18 ●●	19 19 ●●	21 18 △●		24 33 ○○	16	2	1	13	5	318	402	−84
9	ムネカタ	12 11 ●●	9 5 ●●	8 11 ●●	8 18 ●●	13 15 ●●	13 13 ●●	16 10 ●●	19 8 ●●		16	0	0	16	0	189	498	−309

※上位3チームはプレーオフで順位を決定する。

順位	【2部男子】	北陸電力	アラコ九州	トクヤマ	トヨタ自動車	大阪ガス	豊田合成	試合数	勝数	引分数	敗数	勝点	総得点	総失点	差
1	北陸電力		19 30 ○○	28 21 ○○	22 18 ○●	27 27 ○○	34 33 ○○	10	9	0	1	18	259	210	49
2	アラコ九州	18 27 ●●		22 31 ○○	24 26 ○○	24 25 △○	38 33 ○○	10	7	1	2	15	268	211	57
3	トクヤマ	26 18 ●●	21 23 ●●		28 23 ○●	27 21 ○○	33 31 ○○	10	5	0	5	10	251	239	12
4	トヨタ自動車	15 23 ●○	20 13 ●●	23 24 ●○		15 22 ●○	23 27 ○○	10	5	0	5	10	205	214	−9
5	大阪ガス	20 19 ●●	24 24 △●	21 19 ●●	19 19 ○●		26 24 ○○	10	3	1	6	7	215	229	−14
6	豊田合成	23 21 ●●	20 17 ●●	20 30 ●●	16 19 ●●	22 19 ●●		10	0	0	10	0	207	302	−95

※3－4位は対戦間得失点差による。

第24回全国高校選抜大会

男子は大分国際情報、女子は宣真が優勝

第24回全国高校選抜大会は、３月23日から28日まで富山県氷見市ふれあいスポーツセンターに、全国から男女各40校が参加して熱戦を繰り広げた。

男子は大分の大分国際情報高校対長崎の瓊浦高校という九州勢同士の対戦となった。１点を争う大接戦となったが、大分情報が辛くも逃げ切り優勝を飾った。女子は、大阪の宣真高校対京都の洛北高校と、こちらは近畿勢同士の対決となった。試合は前半から優位に立った宣真が、高さとパワーで洛北を圧倒して優勝を飾った。

男　子

■準々決勝

大分国際　38（18—5／20—18）23　那覇西

［戦評］立ち上がりからスピードある攻防が続く。那覇西が平原のサイドからの鋭いシュートで先制した。その後、大分が粘り強い守りからリズムをつかむ。エース小林の連続得点などで大分は４点を連取。13分には８—２と大きくリードした。その後も那覇西のイージーミスをつき、大分は着々と加点、守ってもキーパーを中心に堅い守りで相手に付け入る隙を与えず、前半は18—５と大分が大きくリードした。

後半、那覇西が３連続得点し、必死に追いすがる。しかし、大分はタイミングの良いタイムアウトから７連続得点し、一気に突き放した。終了間際、那覇西もあきらめることなく、大城の思い切りの良いロングシュートなどで反撃するが、前半の得点差が大きく、大分が押し切った。

（吉田　学）

熊本国府　25（8—12／17—8）20　下松工業

［戦評］先取点は、下松工があげる。両校ともゴールをねらうが、力が入りミスが続く。前半、下松工は警告、退場が相次ぎ、思うような攻撃ができない。熊本国府は、下松工に離されないよう必死に食い下がる。

後半に入り、下松工はゴールをねらうが得点に結びつかない。熊本国府は３分過ぎに追いつく。熊本国府もミスが続いたが、態勢を立て直し得点を重ねる。後半、熊本国府・河内の活躍が勝利に導いた。両校とも手を緩めず迫力のある試合となった。

（永井裕子）

高岡向陵　25（12—7／13—10）17　浦和市立

［戦評］高岡向陵は、開始早々、澤田の切れのあるシュートで先制。その後もスピードに勝る高岡は、多彩な攻撃で次々と加点し、７分過ぎには６—１とリードした。一方浦和市立は、エース門山の長身からのロングシュートがことごとく止められ得点できない。しかし、12分過ぎの相手パスミスからの速攻から得点、ようやく落ち着く。その後は一進一退の攻防が続いた。23分過ぎから高岡が3連続得点し、再びリードを広げて前半を終了した。

後半も高岡の勢いは止まらない。立ち上がりから粘り強い攻撃で加点し、５分までに15—７と差を広げた。その後は互いに点の取り合いになる。このまま試合が進むかと思われた20分過ぎ、浦和は佐々木のロングシュートから４点



を連取、激しく詰め寄った。しかし、25分、28分と高岡・大畑が２点をもぎ取り、試合を決めた。終始気迫が勝った高岡向陵が快勝した。

（吉田　学）

瓊　浦　29（16—7／13—7）14　県立伊奈

［戦評］立ち上がりから両校ともスピードのある攻撃が続く。伊奈はチャンスを見つけゴールをねらうが、得点に結びつかない。伊奈の大徳がポストシュートを決め初得点となる。伊奈はチーム一体となり得点をねらうが、ミスが増え、瓊浦との差が開き始める。伊奈はスピードがなくなり始めるが懸命に食い下がりを見せる。一方、瓊浦は岩永が豪快なシュートを決め前半を16—７で折り返す。

後半に入り、伊奈は得点差を縮めようとするが、なかなか差は縮まらず苦戦する。両校とも後半はスピードがある試合となる。両校とも速攻、カットインが得点となった。



伊奈は、前半立ち上がりの失点が響き、巻き返そうとしたが追いつくことができなかった。　　　　　　　　（永井裕子）

■準決勝

大分国際　29（14—10／15—10）20　熊本国府

［戦評］前半立ち上がり、熊本・小林のロングシュートで先制。対して大分は瀧元のミドルシュートで応戦。両チームとも激しい攻防を展開し、10分まで５—５の同点。中盤、大分は小田のミドルシュートなどで３点連取し、試合のリズムをつかみ、16分には10—６と熊本を突き放す。終盤は一進一退の攻防が続くが、大分はキーパー北崎の７mTを立て続けに阻止する活躍もあり、14—10とリードして前半を折り返した。

後半、開始直後から大分は亀井のサイドシュートなどで４点を連取。たまらず熊本はタイムアウトで態勢の立て直しを図る。しかし、大分は堅い守りから森岡の速攻で３点連取し、15分までに24—14とリードを広げる。熊本は坂本の速攻による得点で食い下がりをみせたが、大分が優位に試合を進め、29—20と快勝した。　　　　　　　（本川久直）

瓊　　浦　26（16—９／10—15）24　高岡向陵

［戦評］前半、高岡・澤田のシュートで先制する。高岡は大畑の打点の高い両足ジャンプシュート、瓊浦は岩永の滞空時間の長いロングシュートで応戦。両チーム一進一退の攻防を展開し、10分まで５—５の同点。中盤、瓊浦は野口のサイドシュートなどで４点を連取、高岡は追う展開となる。高岡は懸命に追い上げを図るが、大畑が徹底マークにあい大苦戦。終盤、瓊浦は濱口の３連取もあり、16—９とリードして前半を折り返した。

後半の先制は瓊浦・岩永のサイドからのループシュート。瓊浦は積極的な守りで高岡に攻撃の隙を与えず、攻撃は一転してサイドへ展開する。一方、高岡は澤田、大畑のロングシュートで必死の粘りを見せて４点を連取、21分には19—23と追い上げる。瓊浦はすかさずタイムアウトを要求するが、高岡の勢いは止まらず、23分には21—23と２点差。しかし、瓊浦は辛くも高岡の猛攻をしのぎ、26—24で接戦を制した。　　　　　　　　　　　　　　　（本川久直）

■決　勝

大分国際　19（８—６／11—12）18　瓊　　浦

［戦評］前半、先制は瓊浦・前田のシュート。対して、大分はすかさず３点連取の反撃で、10分までに大分が４—３と１点リード。瓊浦は思い切りの良いシュートを放つが、大分のGK北崎の好セーブにはばまれ、攻撃のリズムに乗れない。中盤以降はスローな展開が続く。24分、瓊浦はタイムアウトで態勢の立て直しを図り、岩永のロングシュートでようやく５—５の同点に追いつく。しかし、大分は山崎、小林、スカイプレイなどの２点連取もあり、前半を８—６と２点リードして終了した。

後半は、大分・小林の先制シュートから３点連取で始まる。対して、瓊浦は小川のシュートからの４点連取で反撃開始。すかさず、大分は瓊浦に傾きかけた流れを止めようとタイムアウトを請求。中盤から両チームは激しい攻防を続け、１点を奪い合う展開に。そして、瓊浦は20分、この試合初めて15—14とリードを奪う。勝負の行方は最後までもつれ、終了直前に大分・山崎のサイドシュートが決勝点となり、19—18と追いすがる瓊浦を振りきり、大分国際情報が接戦を制して優勝を飾った。　　　　　　（本川久直）

女　子

■準々決勝

府立洛北　29（17—４／12—８）12　県立氷見

［戦評］前半、開始早々、氷見は北谷のミドルシュートで得点し好スタートを切った。対して洛北はすかさず斉藤のポストシュート、萩原のロングシュートで反撃。洛北はGK福島の好セーブや堅い守りで氷見の攻撃をはばみ試合の流れをつかんだ。氷見は攻撃に精彩を欠き、パスミスからの速攻で洛北に加点を許した。氷見は小曲のシュートで追いすがるものの洛北に16分から８連取され、４—17と大量リードを許し、前半を終了した。

後半、開始直後、洛北はポストからの萩原、亀山のシュートなどで３点連取した。対して氷見も荒木、立野のカットインなどで応戦した。しかし、氷見は粘りある洛北の守りを崩すことができず、徐々に加点を許した。終盤、氷見は川口のサイドシュートで反撃を試みるがおよばず。攻守に勝る洛北が29—12で氷見に圧勝した。　　　　（本川久直）

小松市立　26（13—10／13—14）24　県立那覇西

［戦評］立ち上がり、固さの目立つ両校はミスを連発。その後、徐々にペースをつかみ、一進一退の攻防が続く。前半25分過ぎ、小松市立のエース米多が立て続けにロングシュートを決め、３点を連取。那覇西も狩俣の速攻などで追いすがろうとするが、小松も負けじと、後藤がカットインを決め、13—10で前半を折り返す。

後半、那覇西はマンツーマンディフェンスに切り替える

が、自力に勝る小松がじわじわ点差を広げていく。しかし、後半18分過ぎ小松に退場者が相次ぐと、那覇西の追撃が始まる。狩俣の速攻などにより、１点差まで詰め寄るが、小松のGK森田がゴールを守りきり、小松が辛くも逃げ切った。（東海芳恵）

宣　真　24（8—3／16—8）11　暁

［戦評］前半、開始直後、宣真は植垣の打点の高いロングシュートでの得点を皮切りに３点を連取。対して暁は、13分に山本の中央からのミドルシュートでようやく反撃。しかし、宣真は、14分から暁の２名退場後、パワフルプレイを展開し、５－１と試合の主導権を握った。終盤、両チームは一進一退の攻防を繰り広げ、宣真が８－３で前半をリードし、折り返した。



後半に入ってからも宣真の勢いは止まらず、津村の切れのあるフェイントからの得点などで５点を連取。対して暁は９分に千葉のシュートで反撃を開始。暁は多彩な攻撃を試みたが、高さがあり、力強いプレスの効いた宣真の守りを崩すことはできず、18分には６—16とリードを広げられ、たまらずタイムアウト。しかし、時すでに遅く、宣真は追いすがる暁を突き放し、24—11で快勝した。（本川久直）

夙川学院　24（14—9／10—9）18　桜花学園

［戦評］立ち上がり、速いパス回しからリズムにのった夙川は、市村、山根のロングシュートが次々に決まる。一方の桜花は、20分過ぎからようやくペースをつかみ、樋口のカットインや、谷口のロングなどで追撃するが、序盤の点差が響き、夙川が５点リードで前半を折り返す。

後半に入り、両者とも一歩も引かない激しい攻防が展開される。夙川・市村がロングシュートを決めれば、桜花・樋口も負けじとロングシュートを決める。しかし、桜花は前半のダメージが大きく、夙川が追いすがる桜花を押し切った。（東海芳恵）

■準決勝

府立洛北　24（13—8／11—9）17　小松市立

［戦評］開始早々、小松は米多のロングシュート、後藤のステップシュートで２点連取し、波に乗ると思われたが、



洛北は亀山のポストシュートや上村の速攻などが決まり、３連続得点する。その後は一進一退の激しい攻防が続く。前半23分、洛北・上村、礒道の速攻が決まる。24分に小松のポイントゲッター後藤が退場すると、洛北の勢いは増し、次々に速攻が決まり、洛北が５点リードで前半を終える。

後半立ち上がり、小松は３連続得点し２点差まで詰め寄る。その後、気迫のこもった固い守りにより、両校得点を許さない。17分、洛北・萩原のロングシュートが２本決まり、洛北が突き放しにかかるが、小松も必死にくいさがる。だが、前半の失点がひびき、涙をのんだ。（東海芳恵）

宣　真　22（12—6／10—11）17　夙川学院

［戦評］開始30秒、夙川・市村のステップシュートが決まる。負けじと宣真・植垣のロングシュートが決まり、両校一歩も引かないスピード感あふれる試合となった。だが、夙川は、宣真の守護神GK十亀の好セーブにより、なかなかゴールすることができない。一方の宣真は、津村のロングシュートや藤井の速攻が決まり徐々に引き離し、６点差で前半を折り返す。

後半に入ると、夙川が高い１－５ディフェンスに切り替えると宣真はなかなか攻め切れない。それでもフリースローから植垣がゴールを奪う。14分、宣真に退場者が相次ぐと夙川は猛攻を開始し、２点差まで詰め寄る。しかし、宣真も必死に引き離し、勝利をものにした。両校ともよく走った、準決勝にふさわしい気迫あふれる好試合だった。

（東海芳恵）

■決　勝

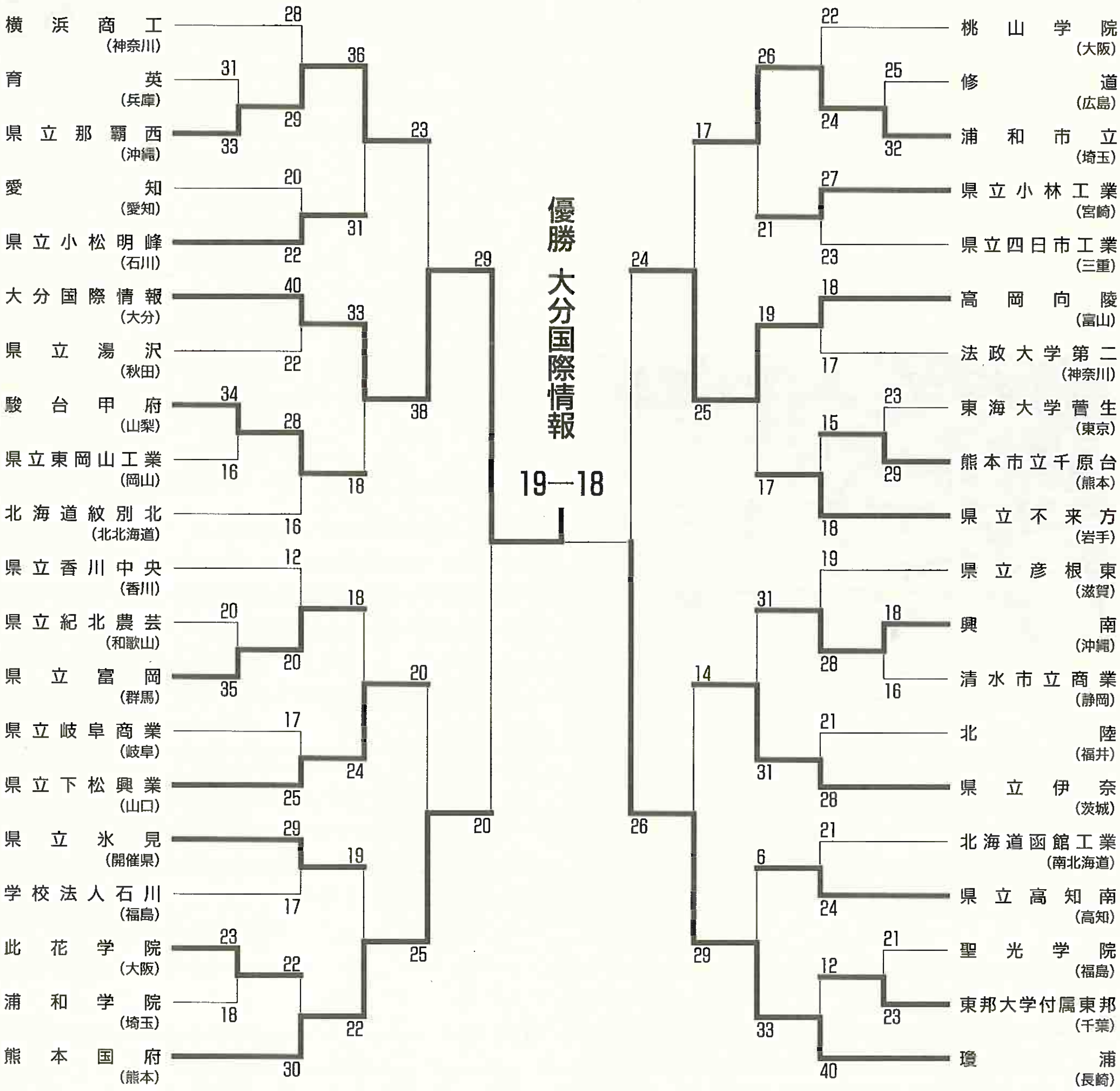
宣　真　20（12—6／8—6）12　府立洛北

［戦評］立ち上がりから、両者一歩も引かない一進一退の好ゲームとなった。宣真は、十亀の好セーブから速攻につなげ得点を重ねる。負けじと、洛北も相手のミスを確実にものにする。20分過ぎから洛北は宣真のディフェンスの高い壁と、十亀の好セーブに阻まれて得点することができない。一方の宣真は津村の３連続得点などにより、５点を連取し、12—６の大差で前半を折り返す。

後半に入っても激しい攻防を展開。宣真は、宮本、藤井のロングシュートなどの多彩な攻撃で引き離しにかかる。洛北も必死に食い下がり、懸命の追撃を試みるが、前半の大差を縮めることはできず、高さとパワーに勝る宣真が勝利した。両校ともよく頑張った。決勝戦にふさわしい、気迫のこもった試合だった。（東海芳恵）

第24回 全国高校選抜大会

試合結果【男子】



第24回 全国高校選抜大会

試合結果【女子】

1回戦

対戦	スコア
県立松橋(熊本) 対 県立大曲農業(秋田)	21－18
佼成学園女子(東京) 対 県立高山(岐阜)	16－26
昭和学院(千葉) 対 清水市立商業(静岡)	22－13
県立倉敷中央(岡山) 対 県立盛岡第二(岩手)	21－24
県立福井商業(福井) 対 横浜創英短期大学女子(神奈川)	23－14
宣真(大阪) 対 県立鹿児島南(鹿児島)	30－13
夙川学院(兵庫) 対 県立賀茂(広島)	28－6
県立高松商業(香川) 対 県立郡山東(福島)	10－28

2回戦

対戦	スコア
県立水海道第二(茨城) 対 県立松橋(熊本)	19－15
東海学園(愛知) 対 府立洛北(京都)	16－24
県立横浜日野(神奈川) 対 筑紫女学園(福岡)	14－18
県立高山(岐阜) 対 県立氷見(富山)	21－27
県立松山北(愛媛) 対 昭和学院(千葉)	12－17
県立那覇西(沖縄) 対 大阪市立桜宮(大阪)	25－19
北海道釧路湖陵(北北海道) 対 県立富岡東(群馬)	13－23
県立盛岡第二(岩手) 対 小松市立(石川)	21－22
県立陽明(沖縄) 対 県立福井商業(福井)	22－23
暁(三重) 対 県立粉河(和歌山)	22－5
聖和学園(宮城) 対 浦和実業学園(埼玉)	23－12
宣真(大阪) 対 県立岩国商業(山口)	24－15
北海道札幌月寒(南北海道) 対 夙川学院(兵庫)	12－43
県立大分鶴崎(大分) 対 県立栃木商業(栃木)	35－12
高岡向陵(開催県) 対 文化女子大学附属杉並(東京)	20－19
県立郡山東(福島) 対 桜花学園(愛知)	14－26

3回戦

対戦	スコア
県立水海道第二 対 府立洛北	13－23
筑紫女学園 対 県立氷見	17－26
昭和学院 対 県立那覇西	22－25
県立富岡東 対 小松市立	12－34
県立福井商業 対 暁	11－16
聖和学園 対 宣真	18－23
夙川学院 対 県立大分鶴崎	26－17
高岡向陵 対 桜花学園	18－21

準々決勝

対戦	スコア
府立洛北 対 県立氷見	29－12
県立那覇西 対 小松市立	24－26
暁 対 宣真	11－24
夙川学院 対 桜花学園	24－18

準決勝

対戦	スコア
府立洛北 対 小松市立	24－17
宣真 対 夙川学院	22－17

決勝

府立洛北 12—20 宣真

優勝 宣真

連載 12

ナショナルトレーニングシステム2000（NTS2000）設立の趣旨と制度について

ナショナルトレーニングシステム運営委員会
運営委員長　蒲　生　晴　明

昨年4月からスタートいたしました標記NTS2000につきまして、関係の方々の絶大なるご支援をいただきまして、計画していた大部分を実行することをができました。ここに御礼申し上げます。さて、文部科学省が昨年9月に発表いたしました「スポーツ振興基本計画」の中で、「各競技団体は、2005年までに一貫指導システム（2001年から競技者育成プログラム）を構築すること」となっており、各競技団体は一貫指導システムを構築することを義務づけられております。

NTSの活動は、この考え方であり、競技団体としてサッカーを除き、構築の第1号となりました。
そして、昨年のNTSの活動に対して、文部科学省・JOCから高い評価をいただきました。

しかし、NTSについて年度始めからのピーアールなどが十分とはいえませんでしたので、今回ここに再度、設立の趣旨と制度につきまして掲載させていただきます。

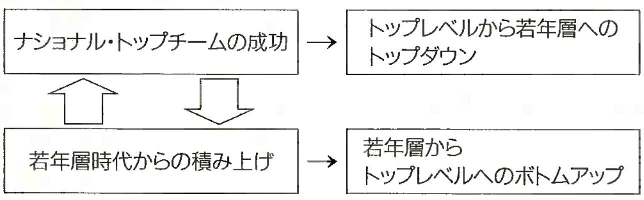
1、　若年層の強化とナショナルチーム

(1)日本のハンドボールは、昭和38年から7人制に切り替わり、38年が経過した。その間に、男女ともオリンピック・世界選手権の出場を果たし、アジアのリーダーシップを獲ってきた。しかし、1988年ソウルオリンピックを契機に、その座を韓国に明渡すようになった。

(2)韓国のみならず、アラブ諸国はジュニア層強化に相当の投資を実施し、その成果は顕著である。

(3)世界では、ヨーロッパ勢が相変わらず強さを発揮している。スウェーデン・フランス・スペインなどの旧西側諸国が勢いを増している。スウェーデンのジュニア強化は、長期的な計画に基づいたものであった。フランスでは、一貫指導システムを実行し世界選手権で優勝している。

(4)アフリカでは、優秀なコーチをヨーロッパから招聘し、将来世界で戦える選手の育成に着眼点を置いた結果、エジプトがジュニアの世界チャンピオンになった。現在では、エジプトは、世界選手権・オリンピックの常連国になっている。アルジェリア・チュニジア・コンゴ・アンゴラなども着実にその成果を伸ばしている。

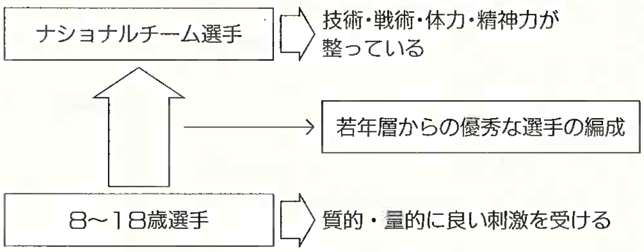


2、　長期的な展望に立った選手の育成

(1)世界の強豪国は、国の協会が主体性を発揮し、常に「世界のハンドボールが今どうなっているのか？」を意識し、若年層からナショナルチームまで、強化・育成の考え方で一つの考え方を示し、独自のスタイルを形成して強化を進めている。

(2)従って、特定の選手のみを集中的に強化している訳ではなく、運動能力の高い選手を低年齢時代から幅広く発掘し、その中から優秀な選手グループを編成して行くシステムを採っている。

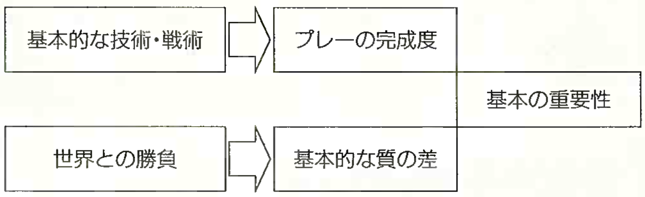
(3)ハンドボール選手として必要な要素は、技術・戦術・体力・精神力の4つである。それぞれの要素を育成して行くには、8～18歳の発育段階で「その質・量」の与え方で大きく変化して行く。この時期に最高の指導を受けたか否かで、大人になってからのパフォーマンスが大きく異なっていく。



3、　基本の重要性

世界の強豪国は、体力・技術・戦術に長けているが、これは、若年層時代にいかに「質の高い」指導を受けたかの証である。日本のハンドボールの課題は、どんな選手でも、誰でもできるような事、簡単にできるであろう事、つまりハンドボールの「基本的な技術・戦術」の完成度である。

実戦で、瞬時に戦況を把握し、速く強く正確に効果的にプレーできるかが、基本的な「質」であり世界を相手にした場合、その「質」の差で勝敗が決まるのである。

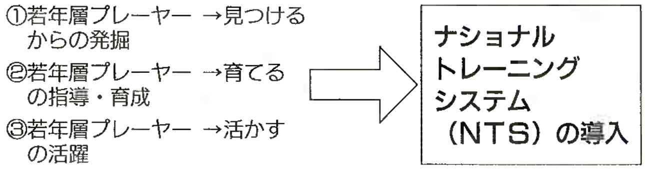


4、　今後の日本ハンドボール界の強化と若年層の育成

1998年4月より、下表の新体制で強化を推進している。この4チームの強化と日本リーグ・学生・高校それぞれのチームの強化が当然必要だが、同時に若年層から、協会が主

体となった一貫指導を実施して行く事を忘れてはならない。
したがって、世界で活躍できる選手を育てるために

ナショナルチーム	日本代表チーム
UNDER－23	学生代表チーム
UNDER－19	ジュニア代表チーム
UNDER－16	ユース代表チーム



上記の考え方として、新しいシステムを構築して行く事が必要である。

今回,この考え方に基づいて、**<u>ナショナルトレーニングシステム（NTS）新設</u>**を企画した。

日本協会は、このNTSを全国9ブロック・47都道府県ハンドボール協会と協力し、推進して行く。

5、ナショナルトレーニングシステム（NTS）

(1)目的

・若年層の運動能力の高い意欲のあるプレーヤーを、早期に発掘し、将来、世界で活躍できる可能性を持った**クリエイテイブな日本代表**プレーヤーに育成する。

・統一された指導方法に基づいた**一貫指導を実施**する。

・**世界を目指した指導内容**を実施し、**指導者のレベル向上**をはかる。

・各地区地域のチーム・指導者に新しいハンドボール**情報を伝達**する。

・以上を実施する事による**普及発展**

(2)場所・頻度

各9ブロックの指定体育館（各県持ち回りとする）にて、実施する。

NTSブロックトレーニングを1回／年実施する。

(3)対象者

・小学生・中学生・高校生×15名×男女＝90名×9ブロック＝810名

・NTSコーチが、任意に推薦選出した選手。全国大会優秀選手。

・推薦選手所属指導者・都道府県協会技術スタッフ

(4)選考

各都道府県に一任する。優秀選手をNTSブロックトレーニングに推薦する。**更に、その中からUNDERに挑戦するセンタートレーニング候補選手を選考することにより、NTS→UNDERへ一貫した体制を構築する。**

(5)指導スタッフ

NTSコーチ

NTSでは、9ブロックにそれぞれ1名のコーディネーター・数名のインストラクター・担当チームを置く。指導スタッフは、次のとおり。さらに、ブロックには、技術委員長1名･都道府県に技術委員長1名を設置する。

・ナショナルチームスタッフ（OB含む）

・日本リーグチームスタッフ

・学生連盟チームスタッフ

・ナショナル選手（OB・OG含む)、JHLチーム選手、大学チーム選手

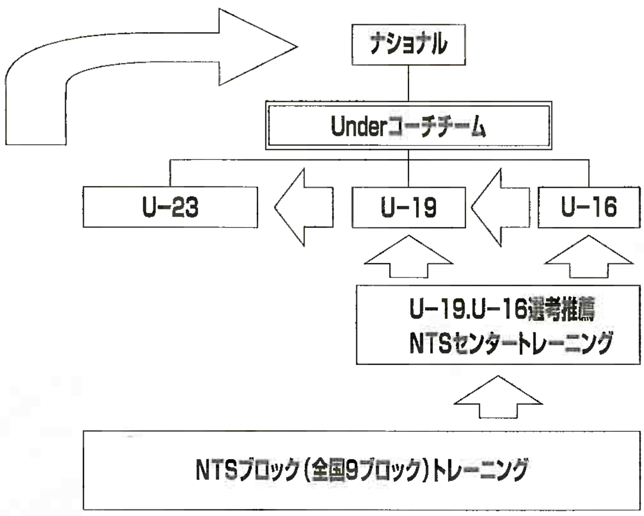
・その他日本協会から推薦されたスタッフ&チーム

(6)費用

・参加選手の交通費は、片道分補助。宿泊を要する場合、3,000円を補助。

・指導スタッフの交通費は、自己負担。

・指導コーチはボランテイアとし、講師料は支給しない。



ナショナルトレーニングシステム2001（NTS2001）計画について

NTS実行関係		諸会議
2001.4	NTS選手選考（各ブロック・県）	第1回NTSジェネラルミーテイング・NTS運営委員会 第1回NTSブロックミーテイング
2001.5	NTS選手選考（各ブロック・県）	NTSコーチ会議（コーチングシュミレーション）
2001.6	NTS選手選考（各ブロック・県）	
2001.7	NTSブロックトレーニング実施	第2回NTSブロックミーテイング（随時）
2001.8	NTSブロックトレーニング実施	第2回NTSブロックミーテイング（随時）
2001.9	NTSブロックトレーニング実施	第2回NTSブロックミーテイング（随時）
2001.10		第2回NTSジェネラルミーテイング・NTS運営委員会
2001.11		
2001.12	NTSセンタートレーニング実施予定	
2002.1	NTSセンタートレーニング実施予定	第3回NTSジェネラルミーテイング・NTS運営委員会（同時開催）
2002.2		
2002.3		

新体制への期待感

企画・広報委員
早川　文司

フリースロー
Free Throw

日本リーグのプレーオフで2000年度最後のスケジュールを終えた。男子は本田技研、女子はイズミがいずれも３連覇を飾り、20世紀の大会を締めくくった。

とくに男子の本田技研はヴォル、ストックランという両大砲を失格で欠く苦しい戦いを強いられながら逆転勝ちした。本田にとっては、この１勝は格別の価値がある勝利ではないかと思う。

２人が失格になったことで、日本人選手が開き直っての猛追。そして終了５秒前の決勝シュートに結びつけたといえるだろう。「われわれでもこれだけ出来る」との自信が芽生えたのではなかろうか。これをステップに世界へ向けて日本のパワーを発進してもらいたいものである。

女子のイズミは昨年、20世紀ＭＶＰ３位に輝いた選手兼任の林五卿監督が１年近く出産のためコートを離れたことで日本人の「やる気」を呼び起こしたといってもいいだろう。全体の戦力の底上げができた。その一例としてＧＫ高森の急成長が挙げられよう。ＧＫが一人しかいないとの危機感も本人には大きなプラスになったようだ。

本田にしろ、イズミにしろ、こうした助っ人抜きでの戦いで得た収穫は計り知れないものがあるだろうし、今後のプレーに目に見えない財産として生きてくることを期待している。

ところで21世紀初頭の日本をリードする新体制が決まった。新任の大西専務理事がどのようなフレッシュな感覚と行動で協会を運営していくか、楽しみだ。

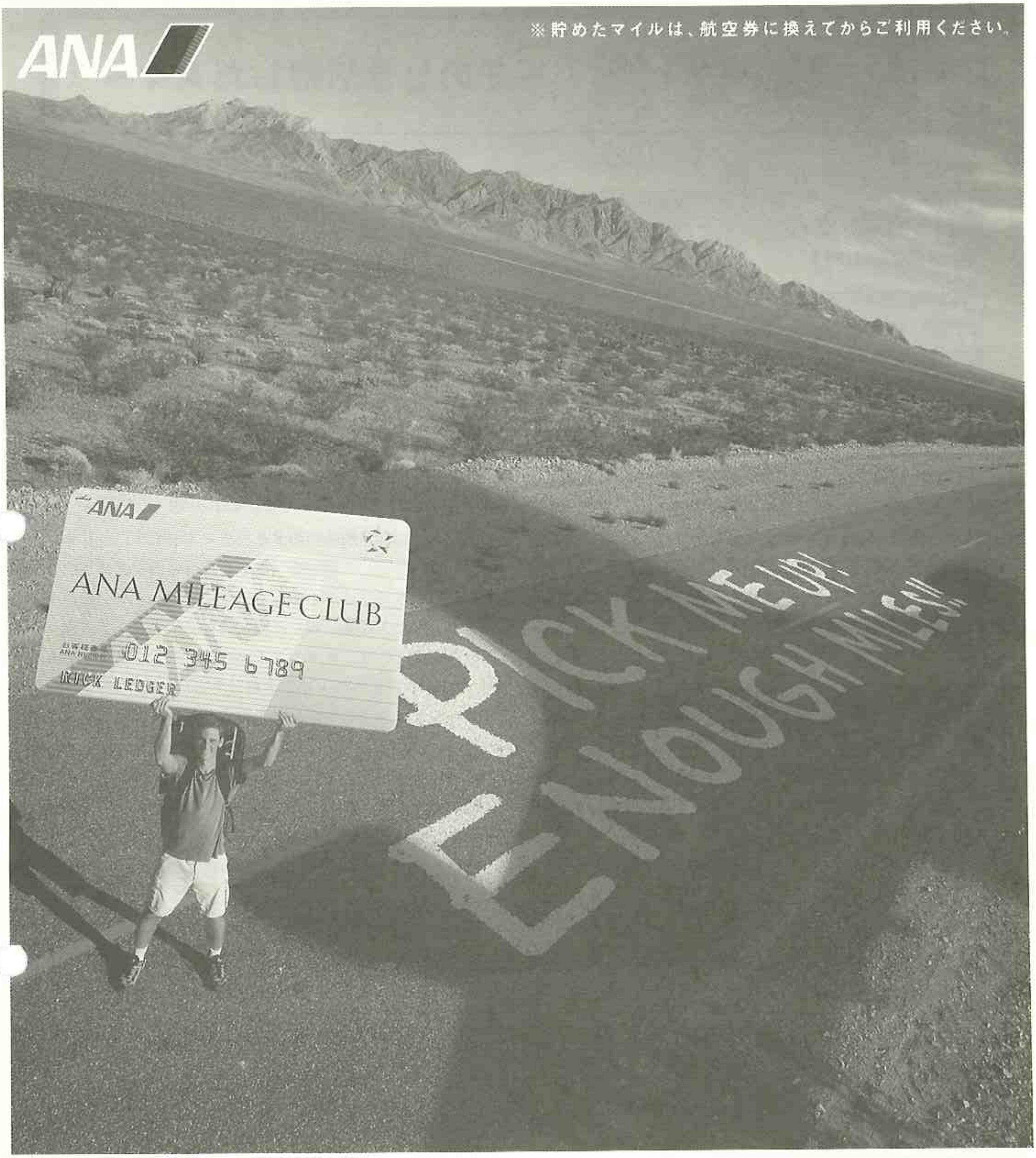
確かに難問は山積しているといえるだろう。平成11年度からスタートした「がんばれハンドボール10万人会」の会員増への積極的なアプローチ、2004年のアテネ・オリンピック出場権獲得、さらには少子化に伴う競技者減少の歯止め策や学校５日制実施による効果的な施策など、挙げればきりがないほどだ。

また昨年、立ち上げたナショナル・トレーニング・システム（ＮＴＳ）の本格的な運用による強化の一時の停滞も許されない。

すべてはアテネに通じる重要な課題であるのは間違いないところである。また、日本リーグをはじめ各大会の観客増へ積極的に取り組んでいくことも避けて通れない。

こうした種々の課題は連動してクリアすることが大切である。ハンドボールに関わるすべての人がしっかりした認識を持って対応することだ。他の競技団体の見習うべきものは見習い、即実行に移していくことも必要ではないだろうか。

ともかく、活発に意見を出し合い、知恵を絞りあってハンドボール界の発展へつないでいきたいものである。代表を頂点にして、日本独自のプレースタイルを構築することが、世界レベルに近づくことにもなるはずだ。素晴らしい未来へつなぐために、愛好者が手をしっかりと携えて21世紀を歩んでいきたいものである。



The MILEAGE of MILEAGES

ネットワークがひろがって、マイルがさらに貯めやすく、使いやすくなりました。

今、全日空の空が大きく広がろうとしています。充実した国内線はもちろん、国際的な航空会社ネットワーク「スターアライアンス」への加盟により、国際線もさらに拡大。マイレージも、ぐっとワイドに貯まります。選ぶなら、やっぱり「ANAマイレージクラブ」。貯めやすさが断然ちがいます。

全日空（ANA）　エアーニッポン（ANK）

＊スターアライアンス加盟の提携エアライン

エアカナダ　ニュージーランド航空　アンセット オーストラリア航空　ルフトハンザ ドイツ航空　スカンジナビア航空　タイ国際航空　ユナイテッド航空　ヴァリグ ブラジル航空

＊スターアライアンス以外の提携エアライン

オーストリア航空　ブリティッシュ ミッドランド航空　マレーシア航空　シンガポール航空　スイス航空

ANAマイレージクラブ

10月31日 全日空は、スターアライアンスに加盟。世界112ヶ国以上、760以上の都市をネットワークで結びます。

・人・物・登・場・ ～そのとき活躍した人々～

さて、今回御登場いただく方は…



新村　理文 さん

(昭和8年5月24日生)

都立墨田川高校で第1回・2回と全国高校選手権に出場。そして東京教育大へ。学生時代には東京クラブで第9回国民体育大会で優勝。昭和31年に来日した西ドイツチームと全日本メンバーとして対戦。教員として大阪府立天王寺高（25年間勤務し国体3連勝）・布施北高・東住吉高を歴任。退職後は大阪府警察本部に嘱託として6年間勤務し、警察官の体力維持、向上に寄与した。大阪ハンドボール協会で役員を務める傍ら国内A級審判員として、昭和58年の全日本総合で定年を迎えるまで、国内で行われた国際試合を含み各種大会で吹笛。

ハンドボールとの出会いについて教えて下さい。

昭和24年、都立墨田川高校に入学しました。実兄が早稲田大学のラグビー部でフルバックとして活躍していましたので「自分もラグビーを」と決めていたのですがサッカーとハンドボールしかなく、「まあ面白そうかな」と思ってハンドボール部に入部したらすっかり虜になってしまいました。当時は創部2年目のチームで、若さあふれる松本重雄先生の熱心な指導を受け、またしばしば東京高等師範学校（のちの東京教育大）の現役チームが来校し、われわれの技術指導にあたってくれました。そのおかげで第1回（藤井寺）2回（駒沢）の全国高校選手権に東京代表として出場し、ともに準々決勝までコマを進め、第5回の国民体育大会にも関東代表として出場することが出来ました。

卒業後は東京教育大へ進まれました。

はい、体力の充実と技術の錬磨に励み、(学連の分裂騒ぎなんてのもありましたが）教育大チームの発展にも寄与できたかなと思っています。第5回から12回まで、全教大の一員として出場。また東京クラブに所属し、第9回の国民体育大会（函館市）では優勝をすることが出来ました。

当時のハンドボールを振りかえってみると、どのようなものだったのでしょうか。

11人制オンリーのころでした。攻守が分業されているシステムです。オフサイドラインの廃止・ゴールエリアラインが11mから13mへ・35mラインの新設（6人攻撃・6人防御）などなど、いろいろとルールの改正がありました。各人、各チーム情熱を傾けて取り組んでいましたが、現在のスピードとスリルに満ちたゲーム内容と比べると、どこかおおらかなハンドボールであったものだな、と感じております。

ハンドボール人生で、忘れられない思い出は何ですか。

昭和31年に世界最強の西ドイツチームが来日、全日本メンバーの一員として最終戦（後楽園競輪場内特設グラウンド…今はもうありませんが）で、競輪場のバンク一杯に埋め尽くされた大観衆の前で死闘(?)を展開したこと。徐々に点差を広げられ、後半のドイツの攻撃中、レフェリーのW.フィックス氏が西ドイツ主将のケンパに「アップブルフ（ゴールスローにしろ)」とささやいたのをたまたま聞いてしまい、がく然とさせられるとともに彼我の実力差をはっきりと知らしめられました。また、翌年に全日本のドイツ遠征が企画され、個人負担1,000ドル(当時は1ドル360円)とか伝えられていたのが結局企画倒れになってしまい、幻の全日本となってしまったこと。これはまことに残念でした。

27才までの選手生活と50才までの審判生活を通じて、多くの知己を得たこと。ことに常にライバルであった日本体育大学の故荒川先生はじめ多くの諸先輩方に公私ともにお世話になったことに感謝致すとともに、ペアレフェリーとして笛を吹いていただいた諸先輩方にも紙面をお借りしてお礼を申し上げる次第です。

「たかがハンドボール、されどハンドボール」

50年あまりハンドボールに携わってこられたことが、現在の生活の基盤となっていることに心から感謝致しております。

いまの日本のハンドボール界に望むことは何でしょうか。

とにかくアジアの王座を奪回し、アテネへの切符を手中に!!　祈願してやみません。

新村さん、どうもありがとうございました。

次号もお楽しみに。

小学生チーム活動特集 その5

小学生クラブの活動報告をご紹介いたします。

■大和ハンドボールクラブ（神奈川県）

① 団体名・指導者名
大和ハンドボールクラブ
代表・二見恵子
指導責任者・澤田騎誉寛（さわだ　きよひろ）

② 所属児童数
6年生・15人　5年生・14人　4年生・1人　計30人

③ 団体発足の経緯
1995年、当時市立大和中学校ハンドボール部顧問の高田富二雄先生（現南林間中学）が小学生にハンドボールの楽しさを伝える目的のもと、大和ちびっこハンドボールクラブを結成。練習は、中学校の体育館を夜間借りて週1回行い、5～6回の練習の後、読売旗ハンドボール大会に出場した。当時のメンバーは、大和中学の部員の弟や妹などがほとんどで人数ギリギリでの出場。初出場のチームは全敗であったが、ハンドボールを楽しむという目的は達成できた。

次年度、クラブは地域の保護者が主体となる形に変え、代表者は毎年保護者が務め、新たに地域から指導者が加わる。毎週火曜日の夜間に学校開放を利用して、体育館で練習しているほか、隔週で小学校の体育館を借りるようになった。発足時は他のスポーツ団体とのかけもちの所属の小学生が多く、大会の参加には障害もあった。また野球やサッカーがメイン、ハンドはその次というメンバーがほとんどだったため、練習も遊び的要素が強かったように思う。保護者の積極的な勧誘などから、少しずつクラブ員や新たに協力する指導者も増えていくなかで、ハンドが一番楽しいという子供が卒業後もハンドボールを続けるようになる。

現在、在籍する指導者は5人。実業団出身のコーチや地元で働くハンドボール経験者が時間をやりくりしながら指導にあたっている。

④ 指導上の留意点

● 本気で接する
子供は指導者が本気で上達を願っているか否か、瞬時に判断する。基本的なプレーや、何度やってもできない子供にこそ真剣に向き合う姿勢を持っていたい。ときに、厳しすぎるか？と自問するときもあるが、できた時は褒め、できない時は繰り返すことは大切であり、その姿勢が子供の集中力を引き出すのには必要ではないか。

● 指導者が学び、感じる
練習目標を果たせないときは子供を叱るのではなく、メニューに無理がないか冷静に考える。指導者のプレー経験からではなく、練習中に子供が発信する様々なシグナルを受け止め、次回の練習に生かしたい。

● 既成概念にとらわれない
指導力不足との御批判は覚悟の上で、ある大会での出来事をお話ししたい。5試合のリーグ戦を一日でこなす形の大会のこと。全体に小柄ゆえ、ゾーンディフェンスでは守りきれないという判断と、まず1対1を責任を持って守る狙いを持って、5試合ともオールコートでマン・ツー・マンディフェンスを指示。何試合もつかとヒヤヒヤしている中で、最後までこの形でやりたいと子供も進言するので続ける。試合の結果は別として、子供達は疲れきっているにも関わらず、「今日が一番楽しかった」と口々に試合の感想を述べていた。ボールをカットしたり、敵のミスを誘うなかで自分達が優位に試合を運べたことが楽しかったと見受ける。確かに一番集中していた姿だった。相手チームのことを一切考えずにとった策だったが、選手が夢中になれる瞬間をいかにつくるか、今後も考えていきたいと思う。

⑤ 地域社会と学校との連携・関わり方について
現在、月2回地域の小学校の体育館を借り、放課後練習をしている。子供にせがまれた学校の先生がときどき顔を見せてくれたり、大会に応援に来てくれる先生もいる。今後は、そのような先生方をいかにクラブの理解者・仲間として取り込めるかがポイントかと思う。また、地域の父親が練習に参加しやすい環境を作っていきたいと考える。

⑥ ある日の練習メニュー
19：10　ウォーミングアップ
19：15　パス練習
19：35　シュート練習
20：00　速攻の練習
20：30　ゲームまたはオールコートで3対3の連続攻防
21：00　解散

⑦ その他・今後の目標

● 広いエリアから参加しやすい練習環境の整備（時間帯・場所・指導者）
平日の夜間という参加しにくい時間にも関わらず、保護者の深い理解のもと練習を続けているが、一層の発展を望むうえで、土日に公共施設で充分に練習できる環境を整えたい。その中で、低学年層まで対象を拡大したい。

● 指導者の育成（計画的育成と指導の標準化）
複数の指導体制をとっていく中で、指導者間の練習目標のコンセンサスは欠かせない。指導経験に差があっても、明確な目標のもとタイムリーに、そして長期的な視点で練習を組み立てる体制を作りたい。

● 子供だけでなく、保護者や先生方にハンドボールの魅力を伝える努力
クラブ員とその保護者（ＯＢ保護者を含む）を対象にハンドボール大会を開いた。保護者のケガを心配していた指導者をよそに、活き活きとしたプレーが続出。今後も定期的にやりたいとの要望が多数出る。今後のクラブ発展を目指すうえで、ハンドボールを通じた教育的ニーズに答えることも大切だが、保護者が実際にプレーして「楽しい！」と思える場や、子供と一緒に楽しめる場を設ける必要もあると感じた。

IHF報告

競技規則の変更と改正（その2）

クリスター・アール(IHF/PRC)
翻訳　岸本光夫

D．時代遅れのルールの変更、すなわち伝承問題の解決

7mスローの判定を罰則として用いているという大いなる批判が長年にわたって続いている。つまり(1)コートプレーヤーが自陣のゴールエリアにボールをかえした場合、(2)ゴールキーパーがボールを持って自分のゴールエリアに戻る、(3)ゴールエリア内にいるゴールキーパーがプレーイングエリア上にあるボールを取り込んだとき、である。勿論ボールの所持を失うことにはなるが、7mスローは理に適った罰則ではなく、だからレフェリーはこのような無情なルールを適用するのをためらう。これは好ましくない不一致を招くことになる。明らかな得点チャンスに関係した状況のために7mスローを取っておく方がよいのである。したがって、このような3つの状況の場合にフリースローを判定するという変更案について、アンケートで皆さんの圧倒的な支持を得ることができ、感謝している次第である。

数年前、チーム責任者という概念を導入したのであるが、これは解決しなければならない何らかの問題が生じた際に、レフェリーもしくはタイムキーパー・スコアラーと話をできる人として、チーム役員の中から選んだ一人のことである。ところが、チームキャプテンにはたったひとつのお決まりの役目、すなわち試合前のコイントスへの立ち会いしか残らなくなったことに気付かなかったのであろう。今なお競技規則でキャプテンは腕章を忘れずに着用しなければならないとされている一方で、競技中におけるキャプテンの特権は完全に失せており、かえって誤解を生むだけの慣習となっている。したがって競技規則に関する限り、チームキャプテンという概念を廃止するよう提案する（もしもチームが内々に非公式に一人、もしくは二人以上のプレーヤーをリーダーとして認めるのであれば、それはそれで全く素晴らしいことである)。コイントスには、チーム責任者が指名した任意のプレーヤーが立ち会えばよい、とだけ競技規則書に定める。

ハンドボールに於ける最も根本的な概念のひとつにゴールエリアがある。攻防のバランスを維持するために、そしてゴールキーパーの仕事を意義あるものにするために攻撃側チームがゴールエリアに入るにはどうしても禁止しなければならない。しかしながら、誰しも直ぐに慣習に疑念を抱いて、なぜボールを所持したチームが常に自陣のゴールエリアに入らないようにするのが重要なことなのか、と尋ねられるはずなのに、研究班としては、今回は充分には及ばなかったが、しかし少なくとも自陣のゴールエリア内からフリースローを実施してはならないとする慣習を部分的になくすよう提案している。皆さんもご承知の通り、ゴールキーパーがプレーイングエリアへ完全に出ていないといった理由で、時にやり直しや遅延につながっている。ゴールエリアに関する違反のためにフリースローが判定された場合は、通常の許容誤差範囲すなわちライン上のポイントからおよそ3mの範囲内であれば、ゴールキーパーがゴールエリア内からフリースローを行ってよい、とすることは可能に違いないと考える。

E．スポーツマンシップと倫理

皆さんは全員、「職人芸的違反」という概念をよくご存じであろう。つまりほぼ確実な相手ゴールを妨害するため、一か八かの状況で意図的に、そして「必要に迫られて」行う違反のことである。サッカーでは、ゴールキーパーが手と一対一になったとき、防御側はゴールやペナルティーキックを避けるため、ペナルティーエリアの直ぐ外側で行う違反を指摘できよう。FIFAではこのような行為をレッドカードの状況と定義しているが、ペナルティーエリア外で何が起こってもペナルティーキックとはならないと考えているため、なにか不自然な解決策である。ハンドボールにおいても同様の状況証拠を数多く見てきている。得点あるいは7mスローの危険を回避するため、スコアリングポジションにいる相手プレーヤーがボールをキャッチする前に違反を試みるよう、コーチが防御側プレーヤーに指導しているのは明白である。このような状況が、現行の「明らかな得点チャンス」の定義に記載されていないが故に、この種の違反が生じるのである。つまり、プレーヤーが既にボールを所持した場合に限り、明らかな得点チャンスが生まれ得るという原則に基づいているのである。しかし、我々皆が知っているとおり、今まさにボールをキャッチしようとしているプレーヤーが得点するのを違反せずに阻止することができない、と直ぐに判断できる状態はあまりにも沢山ある。このような状況で単にフリースローのみを判定するのであれば、ますますアンフェアでスポーツマンシップに反する結果になるだろうと、コーチやプレーヤー、レフェリー他、多くの人も思っている。したがって、「明らかな得点チャンス」の定義を広げてこのような状況を包括するようにし、判定に一貫性を保てるよう競技規則書に定義を直接明記するよう、我々は提案する。この講演の後、各公用語グループに分かれた際には、文書にて手渡されるはずの原則と提案された表現に関して重点を置くよう確認しておく。

近年我々は、直接「失格」を適用しなければならない特殊な状況をより明確に定義し記載するという、特に骨の折

れる仕事に取り組んでいる。多分、レフェリーは競技規則を一貫して適用しようと努力を重ねて上達する必要性にかられるであろうが、根底を流れる原則は明らかである。しかし、あなた方一人一人に追放を適用すべき状況はどのようなものかを教えて欲しいと尋ねたら、ピンからキリまでそれぞれに異なった回答をするに違いないと確信している。ひどい襲い方だからとか、拳を振りかざしたからとか、ボールが近くにはなかったからとか、など、追放の罰則は極めて過酷なものであり、チームは残り時間すべてを一人少ない人数で戦わなければならないということを考慮に入れると、暴力行為の定義が曖昧であることは実に具合が悪く、そして一貫性を見出すには言葉の障壁のためにさらに厄介なものとなっている。我々は今までにも増して多くの意見に耳を傾け、そして追放はハンドボール競技に適切な罰則ではないと我々自身は充分に納得した。その通り、「汚い」プレーヤーを排除し、そして、その通り「失格」相当以上の罰則を適用したいが、追放を判定すると誰の目にもゲームを歪めて潰してしまうことになる。「追放」となる場合と、危険で粗暴極まりない行為によって「失格」となる場合とでは、その罰則の程度になんと大きな隔たりがあるのだろうと思える。我々の考えは、より適切な罰則として当該のプレーヤーをそのときには失格とし、さらに今後の試合にも効力を保つべく、自動的にこのプレーヤーを当該連盟に報告するというものである（IHFでは一貫性を保つため、ガイドラインを発行する予定である)。少数のコーチ連中が懸念を抱いていると聞いて、研究班として我々はびっくりしていると付記しておく。プレーヤーが粗暴な行為をもはや完全に諦めてしまうのではないかと、彼らは懸念しているようである。自分達のプレーヤーの精神状態やプレーヤーに対するあなた方自身の管理能力について、このようなメッセージを我々に送るなんて、正気の沙汰といえようか？

私にとって、恐らく皆さんの多くにとっても、競技中に最も欲求不満を感じる状況のひとつは、両レフェリーが同時に笛を吹き、明らかに方向を差し違える場合である。これは印象が悪く、レフェリー指導者の立場としてがっかりしてしまう。しかも、その瞬間にゴールレフェリーの判定の方が正しかったと気付いても、コートレフェリーの判定を優先するというお役所的な競技規則に縛られてしまう、といった最悪の事態が頻発する。競技規則をよく知っているコーチならしぶしぶながらも承知してくれるが、回避できる、あるいは回避しなければならないミスを受け入れることには、なお不満がつのる。したがって、このようなすべての状況においては、正しい方の判定を採用できるよう、公然とレフェリーは手短に協議できる（実際には、協議しなければならない）という規定を競技規則に書き込みたいと考えている。

競技規則の複雑な問題について研究班で議論するとき、その目的や含蓄について共同研究者のJuan de Diosはなんて慎重にそして詳細に分析するのだろう、といつも感銘を受けている。競技規則条項や競技規則解釈の中にある倫理や道徳の役割について考えると、彼のことも思い出さずにはいられない。もちろん道徳や倫理を考慮するのは難しい、それは原則としてこれに反対する人がいるのではなく、何が倫理的で何が道徳的に正しいのかという見解が十人十色だからである。しかし、研究班ではある特定の問題について大いに議論した。我々はこの問題について２つのレベルに分けて捉えてきた。第一に「スポーツマンシップに反する」ということをどのように定義するのか、そして第二に、あることを違反と定義したときに、実際どのようにしてこの競技規則を実施するのか。それでは簡単にこの状況を説明しよう（皆さんが直ぐに思い当たる状況のひとつである)。グループ検討会の後で皆さん各自の結論を我々のところに提出しなければならない。そう、あなた方の指令の元に幾度も繰り返されてきた問題の状況とはこのことである。：チームが得点を挙げた直後、あるいは攻撃中にボールを失ったときに、相手チームはスローオフあるいは逆速攻を仕掛けようとしている。得点を挙げたチームのプレーヤーの誰かが交代地域に引っ込み、実際には交代しないでコート外で待機し、こっそり入ってボールカットできる、あるいは有利な展開に持ち込めるタイミングを窺っている。他の言葉で言い換えると、このプレーヤーは交代の意図なくコートを離れたことになる。このような行為を禁止すべきであると仮に規定すると、どうすればこれを実施できるのかという疑問の数々が明らかに沸き起こってくるだろう。プレーヤーがベンチへ行った後、例え有利な状況を得ようとしていなくても、そのプレーヤーがコートに戻ってくのを実際に止められるのか？　誰がその意図を判断するのか？　罰則の種類は？　判定をタイムキーパーに任せられるのか？など。

Ｆ．マスコミへの配慮とＰＲの考慮

ユニホームの色とデザインの組み合わせによって、プレーヤーの番号が見分けにくいケースがよくある。特に、多色多彩なデザインのユニホームが登場してさらに見分けにくくなり、観衆やＴＶ視聴者から不満が出ている。番号の周囲は無地（単色）で、かつ番号とはっきりと対比できる色を用いたユニホームをチームは用意しなければならない。と今回書き換える予定である。

おそらく公式国際大会としては初めての試みであったが、1988年の女子ヨーロッパ選手権大会で、コートの領域を区画するラインを引かずに、隣接する領域を色分けしてコート設営した。他の多くの競技では全く当然のこととして実施されている。ゴールエリアのうち、ゴールエリアラインの内側が違う色で塗られることは時にはあるが、もちろんハンドボール競技ではラインを用いるのが流儀である。当分の間は、標準的な方法としてこれまでの流儀が続くであ

ろう。しかし、この試みを通じて、ラインの代わりに色を塗り替えてもよい、と競技規則で認めなければならないと確信している。

チームタイムアウトに関する既存の競技規則をどのように単純化するかについて議論を行った。皆さんの返答、例えばアンケートの回答を見ても、チームタイムアウトをもっと増やす必要を感じていると思わしきものはなかった。これに対し、末端レベルではチームタイムアウトに関心を寄せる者もいた。しかしながら、ＴＶコマーシャルを挿む余地を作ると行ったことが大問題となるようなレベルにおいては、我々はこれに対する配慮を準備しておかなければならない。したがって、標準の競技規則の例外として、IHFは世界選手権大会及びこれに類する大会の規定を変更し、前半と後半に各チームはさらにもう一回ずつ（合計二回ずつ）チームタイムアウトを請求できる、と提案しようとしている。もちろん両チームはチームタイムアウトを行使しなければならないことを示唆しているのではない。しかし、我々の提案を終える前に、あなた方が提言したいと思われる意見すべてに、もちろん我々は耳を傾けておきたいのである。

Ｇ．諸規定

出血した（出血していた）プレーヤーをレフェリーが見つけてコートから出ていくように指示したとき、このような状況については競技規則に明示されていないということで、混乱と苛立ちが時折生じている。この趣旨は、現在では次のような規定に包括されている。止血して傷を覆い、身体とユニホームを拭うために出ていって自主的に交代するのは、プレーヤーの責務である。このような状況において、レフェリーはこれに対する指示をすぐにしなければ、処置を誤ったと見なされるだろう。

大きさの異なったボールの仕様については、ここ何十年も変更されていない。中サイズ（２号球、女子用ボール）の重量の許容範囲が広くて、他のサイズと不均衡であると、今ではあちらこちらから指摘を受けている。したがって、重さの最大値を400ｇから375ｇに引き下げることを提案する。同様に、一番小さいボールについても現行の競技規則では最小値しか記載されていない。290～330ｇという幅を設けるよう提案する。

黒色のレフェリーウエアは、多分ハンドボールの最も古い流儀でのひとつであろう。例え我々みんなの自国に黒色のユニホームを着て競技するクラブが存在していようとも、例え世界でレフェリーウエアのカラー化がどんどん進んでいようとも、黒色のユニホームはレフェリーのためのものであると競技規則に記載されているのである。この競技規則を完全に削除してしまうのは非現実的であろうと思う。黒色のユニホームの着用はレフェリーに第一優先権がある。と記載を少し変更しなければならないと考えている。こうすれば、チームは黒色を着るのをおよそ諦めてくれるだろう。しかし末端レベルでは絶対的ルールというのもあまり意味や価値がないということは承知している。

競技規則第19条の１と２には、タイムキーパーとスコアラーのそれぞれが果たさなければならない任務について、特に詳細で特別な規定が記載されている。ある面では当を得たことであるし、他の面では常識と通例に全く相反することである。他の面というのは、実のところ任務において密な連携と分担が要求されるような、確固たる分業制を意味するのであろう。しかも、競技規則書の中にひとつのルールの形態としてこのような指示があるというのは、必ずしもよい見解とは言えない。というわけで、より緊密に遂行できるように、そして実際には競技規則に包括するべきでない職務をすべて削除して、これらの競技規則の運用を円滑にしようとしているのである。競技規則書の巻末に（競技規則としてではなく）タイムキーパーとスコアラーの標準指針という単元を設け、そこに含めてしまうべきなのかどうか検討中である。もしもこれが不可能ならば、タイムキーパーとスコアラーのための詳細な指導書を別に作成するよう、各国協会に強く要望することになるであろう。

全項目の中の一番最後は、世界選手権大会やこれに類する大会に於いてチーム役員をしているあなた方に関係する内容である。競技中（ＡとかＢ、Ｃ、Ｄと文字の入ったカードによるのが代表的であるが）あなた方をＩＤ化すれば、「誰が誰なのか」を判別できて大変便利であることがわかった。実際にはあなたの同僚が警告を食らったのに、間違ってあなたが警告を受けたとして記録用紙に記入されてしまわないように、と考えているのはもちろんのことである。これを規定化するのはよいことだ、と深刻に考えているが、あらゆるレベルを対象とした競技規則にしてしまうのは非現実的ではないだろうかと思っている。よって、IHFがその選手権大会規定にこれを含めるよう提案するし、大陸連盟や各国協会にもまた適切なレベルでこれを用いるよう要望する。

３．結　論

さて、これで全項目の説明は終わりである。非常に多数の項目があった一方、私が最初に申し上げたとおり、変更案は相対的に小規模であって根本的な問題についてほとんど触れていない、と皆さんは当然ながら感じておられるだろう。あなた方個人としては有用な変更なのにと思われる特別な問題をどうして取り上げなかったのだろうか、と不思議に思うかもしれない。それは、このような問題については極めて充分と思えるほど議論したが、現時点ではこれ以上検討する理由が見つからなかったからなのである。

我々が受け取った全体の回答を肝に銘じている、つまり大変更は現段階で望まれていないし必要ともされていない、と先程申し上げたとおりである。競技規則は現行のままで

妥当であり、レフェリーに一貫性を持って十分に競技規則を適用させることがPRCの重点課題であろう。

しかし、少し注意していただきたい理由が他にもある。例の4年という期間のうち、真中の約2年間だけ競技規則研究班を召集するということを、現在まで4年周期で繰り返してきた。研究班のうち何名かは新しい競技規則書の準備をしなければならないのだが、これを除けば、現研究班の仕事の大半はまもなく終わりである。ついでに言うと、この準備において競技規則の体裁をよくして読みやすくするといった、装丁にも数々の変更を加えようとしている。ご存じの通り、長い条文、見出しのない無数の段落、各規定のでたらめな順序など、形式や体裁は旧態依然としている。

各4年周期の間中、そして周期を越えて完全に継続するのではなくて、一定期間だけ一緒に研究するというのは問題であり、より長期的な問題を充分に検討していくだけの時間が常にあるとは限らないのである。ハンドボールを根本的に改変するような変更については、案件として出すことに用心深くなる前に、これを徹底的に分析して研究し、試行しておかなければならないことは明らかである。今までのところ、IHFは競技規則の発展に対して継続的に重点を置きたがっていない。現研究班は時に活動範囲を制限され、挫折した。我々はこのような研究計画を変更するよう要望している。

これに関連し、次の周期でより深く再調査する必要があると我々が実際に思っている事柄について、この機会に簡単に触れておくことにする。罰則のシステム：個人に適用する罰則とチーム全体に影響を及ぼすような罰則とのバランスは適切か？　交代に関する競技規則：交代可能なタイミングと方法について何らかの制約を考える必要性があるか？　パッシブプレー：DietrichとManfredがこの問題を分析して見事な手引書を考案するという素晴らしい仕事をしてくれたことがわかるだろう、しかし彼らですら全く新しい方法を思考してみる必要性があると認めるだろう。皆さんには他にも数々の例を提案していただきたい。

他種競技における競技規則や発展について我々は精通していることも、理解していただかなければならない。ライバル競技に遅れをとっているとか、他種競技からすごいアイデアを盗めと厳しい意見を下さる方が皆さんの中に時々いらっしゃる。我々は交友関係を持ち、さらにハンドボールにとって何が適切なのかを考えようとしていると念を押しておく。たまたま私はアメリカ合衆国に在住しているので、個人的にはバスケットボール（NBA）やホッケー（NHL）と大変親しい関係にある。我々はサッカー（FIFA）ともよい関係を保っている。しかし、そう簡単にいいものをちょっと「盗んだり」「真似したり」できるわけではないと言っておかなければならない。どの競技においても盛んになっている要因の大部分は、その競技に固有の特性が鍵を大きく握っているのである。他種競技の真似をすれば、当然その競技自身の特性に影響を及ぼすことになる。これに対し、元来さらに全体的で、したがってより導入しやすいのは考え方というものであり、幾分枝葉末節の問題や変更に関与させやすいのである。

元々ハンドボールには根本原理の点で良質な商品があるということで、満足もしなければならないし、もっと自信を持ってよいであろう。象徴的な事実として、他種競技の関係者と競技規則について話し合ったとき、彼らが障壁と考えている競技規則や諸規定に対して懸念を抱いているのを聞いたのである。特定の問題に対して、ハンドボールには自分達より素晴らしい解決方法があると言って、時に少し羨望の眼差しでハンドボール競技規則のある一面を指摘していた。

もちろん我々は視線を向け続けていくが、Daniel Costantiniの談話に戻って私の説明を終えるのがよいだろうと思う。将来を眺めて、競技規則を急激に変更するのではなく、競技規則を明確に適用するよう彼は力説していた。メディアの注目を引くことの難しさについても彼は強調していた。振り返ってみると、戦術的な進歩はこの10年間ほとんど見られなかったのが残念だったと彼は述べているし、私もそう感じている。敢えて言っておくが、これは競技規則の問題とはほとんど、まあコーチであるあなた方が思っている程はあるかもしれないが、関係ないことなのである。だから、本当に皆さんの考えや示唆について聞いてみたいのである。

私の発表をご静聴いただき、深く感謝の意を表したい。このテキストが部屋の後ろに用意してある。私が申し上げたとおり、小グループ討論で補っておいて欲しい項目について説明した別の短い文書もそこにある。ありがとう。

東日本学生男子選抜チーム ロシア遠征報告

●ロシア遠征総括

チームリーダー　佐藤　　久
（全日本学生連盟理事・東北学連理事長）

2月26日より合宿を行い3月1日にSU584便にて16時45分出発（3時間45分の延長）、乗り継ぎの関係でモスクワに一泊し、2日夜クラスノダールに到着。翌3日からは次の様なスケジュールが用意されていた。

3日＝午前・トレーニング／午後＝講習会（ユーリ監督、マキシム、GKコーチ）

4日＝午前・トレーニング／午後＝ゲーム（対SDUSHOR）・開会式

5日＝午前・トレーニング／午後＝ゲーム（対SUNGUL＝ロシアスーパーリーグ）

6日＝午前・トレーニング／午後＝ゲーム（対VICTOR＝ロシアスーパーリーグ）

7日＝午前・市内観光／午後＝ゲーム（対クラスノダール大学＝練習試合）

8日＝午前・トレーニング／午後＝ゲーム（対FAKEL）

9日＝午前・ゲーム（対SKIF－J）・終了後閉会式

10日＝午前・ゲーム（対クラスノダール大学）／午後＝講習会（ユーリ氏、マキシム）

10日の午後の講習会で全日程を消化し、夕食後、宿舎を出発、21時10分発のSU740便にてモスクワへ、乗り継ぎの関係で一泊し、翌11日、モスクワ19時30分発SU581便（アエロフロートの手違いでオーバーブッキングが出て5名は翌日帰国のアクシデントもあった）にて帰国、12日11時05分に成田着・通関後解散した。居残り組も翌13日無事帰国した。

ユーリ氏の計らいでロシアスーパーリーグ所属2チーム（スングルとビクトーア）及び、実力が同等と思われる3チームを招いての大会をセットしてくれていた。また、講習会もユーリ氏の熱意ある指導が行われた。

戦績は1勝1分3敗（クラスノダール大学の練習試合は除く）であったが、どのチームとの対戦においても、個人技、チーム戦術面で学ぶべきことが多かった。

ロシアスーパーリーグ前期8位といわれるSUNGULは、203cm・202cmを筆頭に、平均身長が188cmの大型チームであり、同じスーパーリーグ前期9位のVICTORも平均身長182～3cm内外と思われるが、スピードと技の切れの良いチームで、第一戦で対戦したSDUSHORも同様のタイプであった。若いこれからの世代が中心のFAKELとSKIF－Jも含め必ずと言ってよく、200cmに近い長身ポストがいた。

各チーム共にセオリーに忠実で、ディフェンス面では、高さへの対応、攻めのディフェンスというか意欲的にカット狙いを見せていた。また、相手チームのゲームメーカーやポイントゲッターへのマークも徹底していた。オフェンスを見ても、常に意欲的にゴールを狙っており、スタンディングやステップシュートにも、それが表れていた。しかし、無駄打ち的なシュートはほとんど見られなかった。初期段階での崩しや、セット攻撃における相手ディフェンスの『ずらし』、『ゆさぶり』も、スピードあるパスや他のオフェンスプレイヤーとの連携プレーからのものも目立っていたが、ただ、偶然にというようなことは少なく意図的なプレーが目についた。リバウンドやルーズボールの処理でも、ただ、ボールを確保するというものではなく攻撃に結びついた次へのプレーへ繋げる意図も読み取れた。



ユーリ氏と一緒に福地団長

ポジションの関係から参加選手全員が同じ出場機会とはいかず多少の差は出たが、選手それぞれ、これまで体験しなかった多くのことから刺激を与えられたことと思い、この研修遠征の示す役割は大きく価値あるものと考える。

今回は、ゲーム及び講習会からの研修が多かったが、自分なりに、今後は、さらに滞在期間の増加も図りながら、ロシアのハンドボールについて、もう少し掘り下げて学びたいと思った。一つには、シーズンオフやシーズン中のトレーニングメニュー（理論と実践）、また講習会でも一部指導してもらったが、もう少し突っ込んだ3～4名の攻防戦術（ゾーン別・他）、さらにトレーニング施設の見学もした

かった。

語学という壁もあり、指導をする側も、される側も円滑さを欠く面も見られたが、欲を言えば、この点を解決できる専任スタッフ（現地あるいはチーム調達）がいればと感じた。

今回の遠征に当たり、各選手には参加目標を設定させたが、各自がそれぞれクリアーでき、自分の大学に帰ってそれを生かし、各地区リーグ、東日本インカレ、全日本インカレで活躍するのを見るのが楽しみである。



参加メンバーでの記念撮影

●ロシア遠征について

デレゲーションリーダー　福地　賢介

（全日本学生ハンドボール連盟理事長）

東日本の各学連の競技力向上、活性化、国際経験、生活習慣、文化の研修のため隔年で行われている海外遠征を実施することとなった。候補地として全日本学生選抜チーム（U―23）が遠征したことのあるハンガリー、ドイツ、ロシアなどを検討したが、ハンドボールの合宿には最適とされるロシアのクラスノダール遠征を計画、アレキサンダー氏（ロシア協会会長）、ユーリ氏（ロシア学生選抜チーム及びスキフ・ロフトネスト―1の監督）の協力を得て平成13年3月1日より3月12日までクラスノダール（モスクワより1300km南、黒海の近く）への遠征が決定した。

全日本学生選抜（U―23）と異なり、選考及び強化が目的ではなく、前述の目的のためであった。今回は12日よりロシアスーパーリーグ6強決定戦を控えているにもかかわらず、協力してくれたユーリ氏に講習会（2日間）も依頼した。ゴールキーパーコーチ帯同で熱意ある講習会が開催された。

ゲーム形式での技術研修も、たまたまスーパーリーグ6強決定戦に備えて合宿中のＳＵＮＧＵＫ、ＶＩＣＴＯＲの2チームも協力してくれて、6チーム総当りのリーグ形式で大会を開催してくれた。

スーパーリーグ勢には歯が立たなかったが、実力的に同じレベルとされる『ＳＫＩＦ―Ｊ』や『ＦＡＫＥＬ』もセットしてくれ、それなりの成果が見られた。

ロシア協会のアレキサンダー会長が退任（3月末）予定であったので、モスクワ乗り継ぎの時にロシア協会へ新会長を紹介してもらうことと、7月（女子）と8月（男子）に日本で開催される国際大会の打ち合わせを兼ねて立ち寄ることもあり、アドバイザー的に同行した。

ロシア協会は、アレキサンダー氏の4年間の継続が決定し、さらに、8月の男子の大会にはロシアチーム（ナショナルチームは予定があり、スーパーリーグの上位チーム・ＳＫＩＦ―１＝ユーリ監督）が参加を前向きに検討ということで、初期の目的の一つは果たせた。

●ロシア遠征を終えて

◇ 近藤孝洋（順天堂大学・今チーム主将・CP）

今回の遠征では、合同練習・ゲーム・講習会から自分にとって多くの貴重な体験をした。

ハンドボールの技術向上はもちろんのこと、ロシアハンドボールの理論や考え方、また、他大学の選手との友好、スタッフとのコミュニケーション他、数え上げるときりがないと思われるほど良い経験ができた。

そのような中で自分にとって一番良かったと思えることは、このチームの主将に選ばれ、コートに立ち、福地さんにも言われたゲームリーダーとしてチームを自分なりには引っ張れたと思えることであった。

Ｕ―２３と違い、国士舘大学での合同練習では、選手同士の競合、上を狙うという意識や危機感が感じられず、モチベーションや技術面での差が感じられた。そのため自分が主将に任命された時に、「よしやってやろう。近藤を主将にして良かった」と思われるように意識した。スタッフの評価はわからないが、自分としては後悔はなかった。

初主将、初海外遠征、初のＤＦ、ＯＦ、いろいろ経験できたが、多くの課題も見つかった。今後もこの遠征経験を生かして頑張っていきたい。

◇高田哲志（金沢工業大学・今回副将・CP）

ロシアでの生活、メンバーとも慣れてきたなと思った時にはもう終わりという、あっという間の遠征で、このメンバーで、もっとハンドをしていたいと思った。

国士舘大学での事前合同練習から、メンバーに覇気と意欲が感じられた。それに自分も刺激され、どんなメニューも積極的になれ、ロシアでも、どんな事でも貪欲に吸収していこうという姿勢になった。試合中、ベンチにいても相手や味方のプレーを見ていて、こんなプレーもあったのかと驚きと勉強をすることができた。試合にはあまり出場で

東日本学生男子選抜選手団及び戦績（2001年３月１日～12日／ロシア・クラスノダール）

◇選手団

デレゲーションリーダー	福地　賢介	日本協会理事・全日本学連理事長
チームリーダー	佐藤　　久	全日本学連理事・東北学連理事長
ヘッドコーチ	東根　明人	関東学連・順天堂大学監督
コーチ	細木　建夫	関東学連・拓殖大学監督
コーチ	瀧本　明弘	北信越学連・金沢工業大学監督
コーチ	明石　康宏	関東学連・横浜商科大学監督
ドクター	有田　　忍	協会医科学委員会・産業医科大学
総務兼通訳	坂本ますみ	㈱エモックエンタープライズ

背番号他		氏　名	大学名	学年	身長
1	GK	金林哲平	国士館大学	3年	178
12	GK	矢野正人	横浜商科大	3年	175
16	GK	児玉修知	日本体育大	2年	177
2	CP	近藤孝洋	順天堂大学	3年	188
3	CP	小澤良太	函館大学	3年	173
4	CP	高田哲志	金沢工業大	3年	172
5	CP	本多　亨	横浜商科大	3年	170
6	CP	福田大樹	東海大学	2年	190
7	CP	田辺謙吾	東海大学	2年	188
8	CP	大滝仁志	国士館大学	2年	187
9	CP	吉田武志	国士館大学	2年	178
10	CP	溝淵勇雄	横浜商科大	2年	175
11	CP	茂呂充文	茨城大学	2年	164
13	CP	関本孝浩	国士館大学	2年	162
14	CP	宮崎亮介	函館大学	2年	183
15	CP	坂野文昭	金沢工業大	1年	179
17	CP	沼尻竜二	函館大学	1年	175
18	CP	本尾陽介	金沢工業大	1年	175
19	CP	前川泰久	金沢工業大	1年	168

きなかったが、練習や試合にやりがいがあり、毎日が充実していた。そして、この遠征では技術的なこと以外でも、チームにとって思いやりの大事さを学び、それを意識したことで相手との信頼関係を深めることもできた。社会に出ても役に立ち、人間としての基礎も学べたと思う。

ロシアとの文化や生活に触れたり、様々な人達と交流をすることができ、良い経験をした。

◇矢野正人（横浜商科大学・GK）

このロシア遠征が初めての海外であり、心配もしていたが、日本を出る前に自分なりに目標を立てていた。今回の遠征はキーパーが３名であり、ライバル意識がすごくあり、その刺激でレベルアップを望んでいた。

クラスノダールに着いた翌日の講習会には、GKコーチもいて、練習や講習はかなりハードなものであった。大分疲労したが、勉強になるものであった。

４日からゲームが始まり、自分は外国人との試合は初めてであり緊張したが、スタメンで使ってもらった時は感激した。また、自分が思っている以上にやれて良かったと思ったが、ロシア人のシュートは本当に速いと感じた。試合に出られない時は本当に出たいと思ったが、でも、試合に出て活躍できなかった時、迷惑をかけてしまった。その時のスタッフのアドバイスを絶対に忘れずに、今後のハンドボール人生に生かしていきたい。

初の海外遠征が貴重な経験をもたらしてくれた。

◇クーバン大会全成績

	SUNG	SDUS	VICT	東日本	FAKE	SKIF	勝	分	負	順位
SUNGUL		28 ● 30	29 ○ 25	35 ○ 17	44 ○ 26	40 ○ 29	5	0	1	1位
SDUSHOR	3／6		26 ● 29	30 ○ 20	32 ○ 21	40 ○ 29	5	0	1	2位
VICTOR	3／9	3／8		22 ○ 15	29 ○ 18	41 ○ 32	5	0	1	3位
東日本学生	3／5	3／4	3／6		30 ○ 20	29 △ 29	1	1	3	4位
FAKEL	3／4	3／9	3／5	3／8		41 ○ 32	1	0	4	5位
SKIF－J	3／8	3／5	3／4	3／9	3／6		0	1	4	6位

※１～３位は得失点差にて決定。

◇福田大樹（東海大学・CP）

今回の遠征では日頃経験できない事を多く体験することができ、それが自分にとってプラスになったと思う。最初はコミュニケーションがうまくとれるか、外国人とまともに試合ができるのか、とても不安であった。

日本の学生の中では、自分よりも背の高い選手は多くないが、クラスノダールでは自分の高さは普通であった。そういうディフェンスに対しての崩し、逆にどのようにして守るか経験することができた。

ロシア学生選抜のユーリ監督に教えてもらったディフェンス練習では、プレー中に怠っている点がわかった。

今後、そういう事を意識してやっていきたいと思う。そして今回の遠征で身につけた事を忘れずに、これからの練習に取り組みたい。

がんばれハンドボール10万人会情報

新会員の紹介（2001年3月に入会・更新された方々）

【北海道】
駒林昭三
松　喜美雄
小島収治
渡辺晶子
小林　礼
山辺文彰
田中　勇

【青森】
鎌田孫秀
坂本吉次

【岩手】
中舘豊
上町祐隆
谷藤みゆき

【宮城】
山路康男
菅間進
千田哲史

【秋田】
高橋　肇
古関和子
佐藤ユリ
松岡則夫
佐藤直子
熊谷美香
山本　勲
古関兵衛
鎌田由香
後藤達美
冨樫綾美
佐藤由紀恵
田口真央
小原麗子
千葉未貴
安達翔子
草吉　恵
阿部　憲
高桑繁幸
木曽重芳

【福島】
今野雅益

【茨城】
田中汀子
小野俊弘
北村善夫
佐竹理容室
住尾　勉
細津由紀子

【栃木】
石田正彦
岸　裕幸
伊藤明日香
伊藤宏幸
伊藤未咲
伊藤良子

【群馬】
伊崎克巳
前田達也
宇佐美幸彦

【埼玉】
伊藤　良
高田　誠
齋藤和也

【千葉】
三井　信
植村　彰
石橋　茂
石橋美保
木内久美子
木内兵太郎
坂本静男
稲生道子
内野洋子
西村孝雄
稲生久美子

【東京】
佐藤佳子
市原茂子
早坂美由樹
田島悦子
今井敏之
山中重宣
杉山広樹
川本孝夫
兼子　真
杉山　茂
美之口竜生
長田　敦
松本隆平
江成純子
後藤　登
後藤明美
黒田理子
長田馨一
中村綾桂
湧井悦子
江頭美保子
庚塚克子
西村興八
中澤重夫
中澤文子

【神奈川】
植村　繁
臼井鉄久
渡辺亜由美
杉山義祥
堀内英彦
五島孝彦
芦田一彦
坪井俊之
松井幸嗣
内林淑子
久保弘毅
木本一成

【山梨】
千野恒夫
藤崎　誠
平岡秀雄
斉藤節子
藤井清勝
横森　巧
渡辺英彰
田辺久雄
鶴田　一
廣瀬　淳

【長野】
小口政則
柳沢民弥
柳沢徳枝
小林昌光
青木和彦

【富山】
宮崎美佳
前田隆宏
勝俣裕二

【石川】
酒谷信彦
古橋幹夫
星野藤盛
鳥越浩二
荷川取義浩
谷口俊春

【福井】
田中昭一郎
高野郁代
宇野栄一

【静岡】
帯金充利
清水保雄
山田久美子
山本敏泰
森野慎司

【愛知】
早川弘三
角　紘昭
蒲生晴明
佐藤由佳
西村亮治
増田喜久
奥井　正
浅野幹也
村山みどり

【三重】
岩瀬由恵
喜井翔一
喜井久美子
喜井たか子
梅基幸一
福田亜紀
加藤　公
柳井谷　実
楠　文雄
青山利夫
伊藤良男
宮島俊二
宮本誠二
藤井孝一
岡田嘉一

【岐阜】
森　勝博

【滋賀】
岸下清登

【京都】
藤本　昇
清水正廣
阪田圭江
小山　勉
橋本善次

【大阪】
寺内啓之
塩川正十郎
四方洋子
古庄　誠
山崎　武
山下知子
緒方嗣雄
長川由美子
(株)光エージェンシー
神田　清
小森園多恵子
水野恵樹
山本隆広
馬瀬忠義
松林義政
中村昌幸
恵美正三
久保義雄
濱田　明
奥山繁義
友成　公
北村勝男
古川武彦
本田勝亮
山崎義博
上田さつき

【兵庫】
殿水幸雄
狩野幸介
狩野孝子
狩野裕子
狩野智美
狩野祥信
都倉達殊
殿水喜代子
殿水康司
殿水啓介
梶原和久
山原和明
山原一晃

【奈良】
佐々木英明
森　覚

【和歌山】
小川　武
田中秀和

【岡山】
片山　透
村木理英
厚沢フサ子
厚沢嘉身
大熨嘉彦

【広島】
西川恵美子
長和俊史
小寺幸広
浜本タダシ
山下明子
丸川敏枝

【山口】
森田俊介
廣政清純
織田正則

【香川】
小早川道孝
枯木昌則
岡川昭博
西川和正
玉本文雄
近江秀敏
横田百合子
地濱　強

【徳島】
竹内晃久

【愛媛】
越智紀子
越智加奈
竹村久晴
山田真由美
吉田奈美
森　亜希子
村上香織
志賀佳代
神谷久美子
藤田寛子
塩見沙織

【高知】
有光正憲

【福岡】
桐明　正
土志田アキヒロ

【佐賀】
久保田秀光

【長崎】
杉原ゆかり
青木忠久
石井通義
藤山聖子

【熊本】
松本恵子
村上好江
佐久間克彦

【大分】
種崎建夫
吉良利夫
西江　隆
三崎信治
利光恵美子
小田晴美
小河内康生
ワサダヨシノリ

【鹿児島】
野口智春
池ノ上孝司

【沖縄】
多和田真尚

第１回ビーチハンドボール世界選手権 ４大陸から12カ国が参加

第１回ビーチハンドボール世界選手権の全参加国が決まった。同選手権は、秋田ワールドゲームズの中で、８月23日から25日に開催される。参加をキャンセルせざるを得なかったオセアニアハンドボール連盟を除き、全大陸最強の男女チームが代表として参加する。

オセアニアのキャンセルにより空席となった枠は、ヨーロッパの２カ国が埋める。さらに開催国日本が男女競技に一つずつ枠を持っている。したがって世界選手権に出場資格を持つ国は以下の通りである。

大陸	男子	女子
アジア	イラン	中国
アフリカ	トーゴ	トーゴ
ヨーロッパ	ベラルーシ	ウクライナ
	スペイン	ドイツ
パンアメリカ	ブラジル	ブラジル
開催国	日本	日本
補欠	ロシア	ロシア

スイス男子ジュニア世界選手権 クウェートとカタールがアジア代表に

スイスで行われる今年の男子ジュニア世界選手権アジア代表２カ国は、イラン・マシュハドで行われたアジア男子ジュニア選手権で決定した。11カ国の競争の中から、クウェートとカタールが熱望していた世界選手権の出場権を確保、韓国とバーレーンが補欠となった。結果として20カ国のうち、以下の12カ国がスイスでの選手権に出場を確定している。

2001年男子ジュニア世界選手権（スイス・８月19日～９月２日）

第１シード			
ユーゴスラビア	ベラルーシ	エジプト	スペイン
第２シード			
デンマーク	スロベニア	ヨーロッパ６	ヨーロッパ７
第３シード			
チュニジア	ヨーロッパ８	ヨーロッパ９	スイス（開催国）
第４シード			
クウェート	パンアメリカ１	ヨーロッパ10	アルジェリア
第５シード			
ヨーロッパ11	カタール	パンアメリカ２	南アフリカ

女子世界選手権イタリア開催が確定

第15回女子世界選手権は、イタリアで開催されることが確定した。この決定は、南チロルの組織委員会と協力の上、IHFのエグゼクティブ・コミティでなされた。

この大会には、以下の10カ国が参加資格を持ち、12月２日～16日まで、ブリクセン、ボーゼン、トリエントで開催される。

2001年女子世界選手権（イタリア・12月２日～16日）

第１シード			
ルーマニア	ロシア	クロアチア	スウェーデン
第２シード			
スペイン	フランス	ヨーロッパ６	ヨーロッパ７
第３シード			
アジア１	ヨーロッパ８	ヨーロッパ９	イタリア（開催国）
第４シード			
ヨーロッパ10	アンゴラ	パンアメリカ１	アジア２
第５シード			
ヨーロッパ11	アジア３	コンゴ	パンアメリカ２
第６シード			
ヨーロッパ12	チュニジア	パンアメリカ３	ヨーロッパ13

（アジア代表は第１が韓国、第２が日本、第３が中国ですでに決定している）

女子ジュニア世界選手権はハンガリーで 20カ国中12カ国が決定

ハンガリーの女子ジュニア世界選手権に参加する20カ国のうち12カ国は以下のように決定している。

2001年女子ジュニア世界選手権（ハンガリー・７月29日～８月12日）

第１シード			
ルーマニア	ロシア	クロアチア	スウェーデン
第２シード			
スペイン	ノルウェー	ドイツ	ユーゴスラビア
第３シード			
韓国	チャイニーズタイペイ	デンマーク	ハンガリー（開催国）
第４シード			
ブラジル	オランダ	アンゴラ	日本
第５シード			
チュニジア	トルコ	中国	アルゼンチン

ニュースの人

エルビン・ランツIHF名誉会長に、IOC委員長ホアン・サマランチから、IOCのオリンピック勲章を授与する旨の連絡があった。オーストリア出身のランツ氏は、1984年から2000年まで世界のハンドボールを指導し、昨年11月、ポルトガルでの総会で退任した。

IHF副会長、IOCメンバー、クウェートの青少年スポーツ相を兼ねるアーマッド・アル・ファハド・アル・サバー殿下に、政府内に入るよう要請があり、特にメディア政策の責任者となる。

ヴゥーノン・ウィニタナ（ニュージーランド）が、オセアニアハンドボール連盟第７回年次総会で、同連盟の会長に選出された。また、チャールズ・カロ（バヌアツ）が副会長に、ジョージ・コスタス（オーストラリア）が専務理事に選出された。

2001年男子世界選手権 オールスターチームとMVP

2001年男子世界選手権は、地元フランスの優勝で幕を閉じたが、このときオールスターチームと最優秀選手が選出されている。

オールスターチーム

GK　テビット・バルフェット　（スペイン）
左45°　ユン・キョーシン　（韓国）
センター　フッセイ・ザキ　（エジプト）
右45°　ステファン・ロブグレン　（スウェーデン）
右サイド　ツィキチャ・ミロサヴィリェヴィッチ　（ユーゴスラビア）
ポスト　ベルトラン・ジル　（フランス）
左サイド　エデュアルド・コクチャロフ　（ロシア）

最優秀選手

ステファン・ロブグレン　（スウェーデン）

平成12年度アテネ強化特別事業へのご協賛御礼

㈶日本ハンドボール協会
会　長　米　倉　　功
アテネ強化特別委員会
会　長　岩　井　正　樹

平成12年度より発足致しましたアテネオリンピック出場必達を目指しますアテネ強化特別対策に対し、絶大なるご協賛を以下の各社より頂きました。

トヨタ車体㈱、
本田技研工業㈱鈴鹿製作所、
本田技研工業㈱熊本製作所、
湧永製薬㈱、大崎電気工業㈱、アラコ九州㈱、
㈱三陽商会、北陸電力㈱

アテネ強化特別委員会では、発足以来、ヨーロッパ（スペイン）での拠点設置、世界学生選手権選手団支援、ナショナルチーム外国人コーチ招聘、若手有望選手のヨーロッパ留学、アジアナショナルサーキットなど、アテネオリンピック出場を必達するための事業を次々と展開しております。

これも、ご協賛各社のご協力の賜物と感謝する次第であります。平成13年度も、諸施策を展開してまいりますので、引き続き絶大なるご理解、ご支援のほどよろしくおねがい致します。

最後になりましたが、ご協賛各社の益々のご発展を祈念致します。

協会だより

平成13年3月度 常務理事会

［日　時］平成13年3月10日（土）
10：00〜12：00
［場　所］明治神宮会館第一研修室
［出席者］山下専務理事代行、常務理事8名、理事2名、参事3名、アテネ特別強化委員会会長

審議事項

1. アテネ特別強化委員会について

岩井会長より、今まで欠けていた理事間のコミュニケーションを図り、確認しながら今後の方針を決めたいとの発言があった。

緒方強化部長より、計画の概要が説明された。

イ、ナショナル強化期間の形成
ロ、高校生、大学生中心に強化し、レベルアップを図る。
ハ、年間試合数の増加、特に海外試合数を増やす計画。

春のアジアサーキットのスポンサーが決定。

ヨーロッパに拠点を置き、学生を留学派遣、現地で強化活動を実施。

資金の面は、日本リーグ加盟チームを中心に依頼。3月までに確立したい。矢崎総業のスポンサーが決定。

2. 登録金等検討委員会委員について

検討委員会委員名簿が提出され、委員について承認される。

3. 規程集作成について

200部を作成、役員、評議員、加盟団体等に配布。

4. ビーチハンドボール強化について

秋田ワールドゲームズにかかわり、ビーチハンドボール強化について提案され、承認された。

5. 平成13年度会議日程の変更について

平成13年度4月、10月常務理事会日程が、4月21日、10月6日と変更された。また、会議場所について、5月が神戸、7月が大阪に変更された。

6. 日本協会役員、組織変更について

平成13年度日本協会役員、組織の変更について検討された。

平成12年度 臨時全国理事会

［日　時］平成13年3月10日（土）
13：00〜15：45
［場　所］明治神宮会館第一研修室
［出席者］山下専務理事代行、常務理事8名、理事3名、参事8名、監事1名、代理出席者2名、オブザーバー2名

報告事項

I　総務本部

総務担当常務理事より下記の報告。

1. 登録金検討委員会

同委員会名簿の提出があり、6月を目途に結審予定の旨報告。

2. 日本協会規程集作成

新版を配布予定。

3. 平成13年度事業日程表（案）の変更箇所

4月常務理事会　　4月21日（土）
5月常務理事会　　5月12日（土）
（午前中　於神戸アジアナショナルサーキット時）
7月常務理事会　　7月14日（土）
（於大阪　実業団選手権時）
10月常務理事会　　10月6日（土）

4. 平成13・14年度日本協会評議員候補者選出

候補者推薦は締切3月31日を確認。

評議員は、発言もその後のフィードバックも、広く適切なレベルで行える人を選出してほしいとの要望があった。

5. 平成12年度日本協会表彰者推薦

現在までの表彰者リストを参考資料として配布。締切は3月31日。

II　強化事業本部

第一回ビーチハンドボール世界選手権／秋田ワールドゲームズについて。

強化部長より元ナショナル、実業団選手を使い男女ともに優勝をねらう旨、また競技本部長より8月までに全日本大会、各地大会、合宿を行い、特に日本が『発祥の地』となることに留意したいとの意向が述べられた。

III　がんばれ10万人会

最新状況と新年度活動計画の報告。

1. 現在会員数1381名だが、一ケタの都道府県がまだ20県ある。10万人会は各都道府県協会への還元金、ひいては県内活動にかかわるという認識が必要。
2. 毎月の作業としては15日に会員の更新手続き、25日に新会員手続きを行う。

競技人口7万5千人、役員等1万人、計8万5千人を10万人となるように、マイナースポーツからの脱皮を図る。

審議事項

I　ブロック・連盟選出理事の決定

ブロック・連盟から選出された代表より理事・参事が決定された。

II　理事の職務・業務分担の決定について

1. 平成13・14年度日本協会理事の職務分担について、会長提案としての分担が決定した。
2. 平成13・14年度常務理事業務分担について、大西新専務理事より新年度方針

として以下の概要が述べられた。

・副会長にも業務分担

渡邊副会長—国際

冨田副会長—普及・全般

山下新副会長—日本リーグ・事業・財務

・特任副会長にアテネ特別強化委員長 岩井正樹氏

・特別普及委員会を設置、指導・普及担当新常務理事の角氏を中心として内容の検討をはじめ、市町村協会を束ねていくことが今後重要課題となっていく。これはハンドボールの基盤にかかわることであり、すなわち将来のハンドボールの命運がかかっているともいえる活動であるとの補足があった。

常務理事・参事の業務分担が提案され、承認された。参事は、活動により必要に応じて随時増員予定。

3. 組織図について、新組織図（案）が提出され検討。位置付けの問題点としては日本リーグ機構とNTSが挙げられ、修正案が出された。新設機能としては、アテネ強化特別委員会に女子の部を設けることを常務理事会にて決定、会長にオムロン立石社長、副会長に立山アルミ竹平社長に依頼。またプロジェクト21委員会会長には岩井氏が就任、機構改革をはじめ21世紀のさまざまな課題に対処する。今後スタッフの充当をしていく。

4. 新執行部が円滑に業務を遂行できるよう、新旧各業務担当の引継書を作成提出することが提案され承認された。提出締切は3月31日。

5. 参事・各委員会委員の推薦依頼がなされた。推薦の締切は3月31日。

大西次期専務理事より、さらなる普及のために各本部の下にある委員会の機構整備をすること、各都道府県協会と風通しのよいつながりを持つこと、活動単位を市町村協会へと移していく必要性があること等の方針が表明された。

Ⅲ その他

1. 各ブロックからの報告等

1. 関東

平成15・16年度高校選抜（40校）開催地の依頼を受けたが、分散開催せざるを得ない。最大の問題は運営費。

2. 北信越

国体の夏季移行に伴い、国体出場枠の増大を図り、1種別は全県1チームの参加をさせ、全国大会に数多くのチームを出場させるとの意見が述べられた。

3. 近畿

大規模大会を近畿で開催することが多いため、日本協会のきめ細かなバックアップがほしい。JOCジュニアオリンピック大会について緒方強化部長より具体的な依頼を出してほしい旨の要望があった。

4. 中国

諸会議の代理出席について、市原理事より諸会議欠席の場合は必ず代理出席者を出してほしいこと、代理出席者に議決権はなく、委任状を提出とすることを再確認。

5. 四国

NTSを夏休みの土日以外にやってほしいとの要望があった。

6. 九州

高校選抜は、審判や指導者育成のためにも開催地を輪番にできないかとの要望。またA級審判が少ないとの報告。

全日本総合選手権大会は各都道府県に提案しているが、新幹線沿線を一つの条件としていること。選手登録カテゴリーについては『一般B』を平成14年度に再設する予定であることを説明。

7. 教職員

マスターズは年々チーム数が増えており、近い将来協会からの補助を期待している。

8. 高体連

8月末に日・中・韓ジュニア交流事業が開催されるが、国体予選と日程が重なるため、日程について調整が依頼された。また、NTSと高体連について意見が述べられた。

ＮＴＳについては市原理事より小異を捨て大同を主旨として進めてほしい旨の要望があった。U-19のレベルアップについて、アジア選手権を辺鄙な所ではなく日本のようなところに呼ぶかどうか、その場合の費用をどうするか。または同選手権よりも欧州遠征の方がむしろ効率的であるかどうか等、検討が必要であるとの意見が出された。

2. 平成13年総合女子日程について

平成13年度全日本総合選手権大会女子の部の会場と日程が以下のように決定されたことを報告。

12月24—27日　千葉県

24日、25日　国府台市民体育館

26日、27日　塩浜体育館

業務引継について、大西次期専務理事より情報の共有のためにできるだけコンピュータを設けてほしいとの要望。

ハンドボール研究「第１号・第２号」 購入のご案内

【申し込み方法】

現金書留で、冊数をお書きの上、下記の住所にお申し込みください。

〒150−8050　東京都渋谷区神南1−1−1　岸記念体育会館内　㈶日本ハンドボール協会　☎03−3481−2361

第１号・第２号とも１冊1,000円です。　FAX03−3481−2367

【第１号の主な内容】

［講　　演］小学校体育の新しい方向とボール運動　杉山重利（島根大学教授）

［授業提案］ゲーム領域―小学校３年生　泉　千恵（名古屋市立常磐小学校）

ボール運動領域―小学校５年生　筒井孝行（名古屋市立西城小学校）

［講　　義］ボール運動教材としてのハンドボール　土井秀和（大阪教育大学）

［論文・実践報告］

名古屋市における小学校ハンドボールの歩み・角　紘昭（名古屋市立東山小学校）

小学生のためのハンドボールゲームの教材づくりに関する研究

小林和子（山形県長井南中学校）／大西武三（筑波大学）

角　紘昭（名古屋市立東山小学校）／佐藤　靖（秋田大学）

子どものかかわり合いを大切にしたミニハンドボールの授業・脇野哲郎（附属新潟小学校）

ランニングハンドボールの授業作り―小学校２年生・澤田　浩（長野県立科小学校）

ボール・キャッチの初心者指導・清水宣雄（国際武道大学）

市原常務理事 東アジア競技大会日本選手団団長に

日本ハンドボール協会よりＪＯＣ理事に選出されています市原則之常務理事が、５月19日より大阪で開催されます東アジア競技大会に日本選手団団長として参加されることになりました。東アジア大会でのハンドボール競技採用には市原理事のお力添えが大きく、今回もまた、日本選手団団長として、何かとハンドボール競技にお力添え頂けるものと思います。

[5月の行事予定]

〈大　会〉………………………………………………

5月11日㈮〜17日㈭　アジアナショナルサーキット

神戸市、京田辺市、三田市、生駒市、彦根市、高砂市

ＴＶ放映予定　5月13日㈰　サンＴＶ　12：30〜13：30

5月17日㈭　サンＴＶ　18：00〜19：55

5月19日㈯〜27日㈰　東アジア競技大会　大阪府

〈常任理事会〉………………………………………………

5月12日㈯　神戸市

HAND BALL CONTENTS MAY

柔らかな感触で、最適なバウンド！

new



新発売

new



PKCH3-AD DX
5,500円

new



PKCH2-AD DX
5,400円

アデランテ　前進

PKCH1-ADJ
3,600円

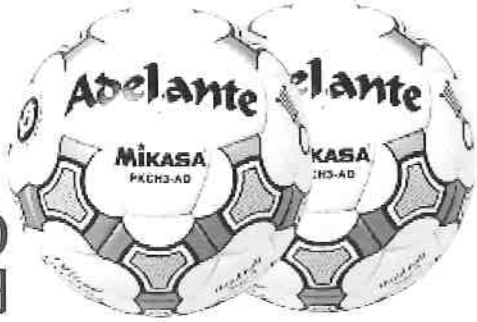
手縫い・国際公認球

OFFICIAL BALL APPROVED BY J.H.A.

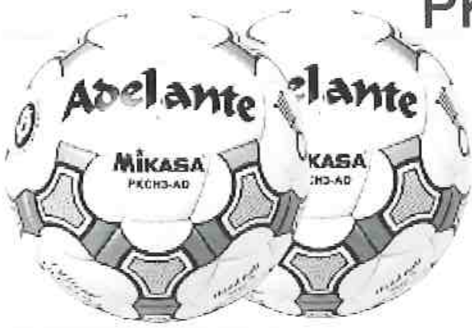
PKCH3-AD
4,600円



PKCH2-AD
4,500円



PKCH2-ADR
2,700円



PKCH3-ADR
2,800円



MIKASA®
明星ゴム工業株式会社

(財)日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』 第四一八号
昭和四十年六月七日
第三種郵便物認可
平成十三年四月二十六日印刷
平成十三年五月一日発行
東京都渋谷区神南一－一－一
電話 代表 三四八一－二三六一
振替 〇〇一二〇－七－一〇二九三
編集兼発行人 市原則之
定価 年間三三〇〇円
（一冊三〇〇円）